

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
平成二十九年八月一日発行（毎月一回）日発行
第十六卷 第五号（通巻一八五号）

万象

B A N S Y O

八月号

2017. 8



八月の句

流燈や一つにはかにさかのぼる

飯田 蛇笏

「俳句は言葉を生かすために切る。」と何かで読んだことがある。

音楽や生花等が対象を生かすために切り取るように俳句も言葉の選択と組合せを誤まると、意とする心の動きや、その場の状況さえも定かには伝わらない。

この句は各々が思いをこめて水に浮かべた、数多の燈籠の一つが風にあおられたか群から離れ、俄に上流へと滑りゆくさまを簡潔に描きつつ、夜の闇に浮く一灯に心を通わす蛇笏自身の、かの世へと送る御霊への深い思い入れが伝わってくる。

(森岡恵子)

平成二十九年

八月
号

万象

B A N S Y O

○草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生
して居ると、造化の秘密が段々分つて来るやう
な気がする。

——正岡子規「病牀六尺 八十七」から

万 象

平成 29 年 8 月号

名誉主宰作品 夏の風 大坪 景章 4
主宰作品 雉子の声 内海 良太 5

作 品

祝 婚 小林 愛子 6
風 薫 る 飛高 隆夫 6
オールドローズ 江見 悦子 7
青 嵐 福島せいぎ 7
夏つばめ 原田しずえ 8
柿若葉 山田 春生 8
続・万象と共に⑧ 八月や六日九日十五日 内海 良太 9

同人作品

内海良太選

同人作品の佳句 内海 良太 10

第十五回「万象」新人賞発表 編集部抄出 34

新人賞受賞作品 藤田裕子・古川京子 35
新人賞の選考経過 36
選考の感想 38

句集鑑賞 俳句形式の器を満たした詩 武井美代子『あしかび』 小林 愛子 40

同人特別作品

ニシン街道増毛^{ましけ} 佐藤 哲 42
祭 来 る 伊川 玉子 43

内海良太句集『青嶺』自選句鑑賞⑤

和歌の浦夕立過ぐれば潮招き 亀田やす子 44

小林愛子句集『阿夫利』自選句鑑賞⑤

鈴屋の鈴のいろいろ松の芯 山本 右近 44

朝粥に面うるみぬ梅の花 川口 崇子 45

若桜ときそひ淡墨桜散る 山本みゆき 45

諸九尼のこと(二) 恋に生きた女流俳人 広瀬 俊雄 46

特別作品評(六月号) 吉中 愛子 49

同人作品評(六月号) 大木 茂 50

万象招待席 額の花 大山 春江 52

谷保天神 赤松 郁代 53

万象ノオト「旅」 塙テル、富田要、石川純子、山口秀吉、瀬野喜代子、山森明子 54

「万象」文学散歩⑬ 伊豆 伊豆を愛した井上靖 加山ひさ子 57

俳書探訪 山本とく江 58

蕪村処々⑤ 春風と春風 蕪村「春風馬堤曲」よりの試論 福田 雅子 59

巻頭作家(七月号)プロフィール 川村みよき(新潟) 佐藤 三男 60

万象作品

飛高隆夫選 61

万象作品の佳句 飛高 隆夫 77

選者のはなし⑩ 山本 右近 79

第十三回「万象」千葉県支部俳句大会 大坪あきら 80

静岡「初花」武蔵野吟行 「武蔵野歳時記」完読記念 藤原千代子 81

「万象」中央句会報(五月)、「万象」同人句会報(五月) 82

東西南北 84

夏の風

大坪

景章

(名啓主宰)

へほ口を叩けば夏はへほの風
いつも来る新茶は風を喜ばず
新緑の森は眼の前歩きたし
青空を正面にして橡の花
挿菊に触れてよろめく齡かな
変はらぬは夏もそのまま同級生
すべる屋根すべらぬ屋根や若葉風

雉子の声

内海

良

(主筆) 太

雉子の声沼一面を引き締むる

人麻呂の話うやむや残る鴨

葉桜やたためば屋台ひと抱へ

ぐらぐらと脚立据ゑては緑摘む

愛新覺羅溥傑寓居

夏座敷壁に溥傑の愛の詩^{うた}

能登七尾柿渋染の夏のれん

膝ついて墓にもの言ふ男かな

祝 婚

小 林

愛 子
(副主宰)

祝婚や日に並び立ついばらの芽
裏木戸の開け放ちあり花山椒
郁子雄花月なき夜を散りつげり
宅配の近づきしとき実梅落つ
野葡萄の花の長蔓くくりあげ
真つ白にシート乾きぬ柚子の花

風 薫 る

飛 高

隆 夫
(万象作品選者)

この庭に舞ふ蝶いづくにか眠る
風薫る真つ暗がりを寄せて来て
日暮れても藤や光を手放さず
藤若葉褪せたる花をおほひけり
白靴をはきて疲れてをりにけり
夏つばめ菓子舗の多き城下町

オールドローズ

江 見 悦

(編集人)

岡本敬子さん、同人会総会出席

今日 は 花 開 くて ふ 札幌 の 人
海 霞 みを り ネ モ フ ィ ラ の 丘 の 果 て
雷 雨 去 り 白 藤 の 波 う す み どり
杏 咲 く 空 新 し き 峡 の 朝
白 き も の 一 斉 に 干 す 立 夏 か な
一 輪 の オールドローズ か ぐ は し き

青 嵐

福 島 せ

い ぎ

(同人会会長)

頂 上 に 羊 吹 か る る 青 嵐
着 水 の あ と 争 へ り 春 の 鴨
台 湾 の 雁 字 搦 め の 粽 解 く
灯 台 の 見 ゆ る 岩 場 の 鹿 尾 菜 刈 る
阿 波 水 軍 跡 の 筍 流 し か な
肩 組 ん で 寮 歌 を う た ふ 城 若 菜

夏つばめ

原田しずえ
(顧問)

喪籠りのすだれとなれり藤の花
正岡子規展
 のぼさんの絶筆これや聖五月
 うまずめの乳房に触れぬ湯の菖蒲
 走り茶をいれて二階の夫呼べり
 橋立の松を掻き消し黄砂くる
 橋立の砂洲と照り合ふ夏つばめ

柿若葉

山田春生
(顧問)

府中祭
 手を打つて万灯はげます祭衆
 菖蒲湯にぬくもる老いのいのちかな
 八十のいのち高ぶる紅牡丹
 葉桜のそよぐ弁慶硯の井
 柿若葉父は百まで生きたるぞ
 朴咲くや雲を脱ぎゆく神の山

八月や六日九日十五日

内 海 良 太

去年の八月、俳誌「鴻」(主宰・増成栗人)から小林良作著、「八月や六日九日十五日を追う」真の先行句を求めて」と題した評論が楽しい装幀のもと、小冊子となって発行された。先行句に対する礼儀と敬意をこめた語りに、久しぶりに爽やかな読後感を味わった。

また八月が来たら読んでみようと思本棚の目立つところに収めておいたが、その八月がやってきた。

話の発端は小林良作氏の作品(八月や六日九日十五日)を、ご自身の所属する「鴻」の大会作品に出句したところ、選者から先行句があるようだ、とのことだった。

作者不詳だが確かに先行句の存在が確認され、句を取り下げた小林氏は、「日本人として、忘れることのできないあの八月の思いを一句に成した先人……どなたが、いつ詠まれたのであろうか。最初の作者を知りたい!」と宣言して、追跡調査が始まった。

精力的な調査により、既に十数句の先行する類句のあることが判明した。その中で制作年代が最も古かったのは平成4年、尾道の医師・諫見勝則氏の作だった。

更に、この句が宇佐市の飛行場跡の公園に「尾道市 諫見勝則」の銘で句碑にもなっていた。小林氏は諫見氏に話が聞きたいと尾道に足を運んだが、諫見氏はすでに故人となられていて、ご子息が父親の医院を継いでいた。ここから諫見氏夫人はじめ、ご遺族との心温まる交流が始まり、ようやく句の誕生の経緯を知ることができた。

諫見勝則氏は、大正14年諫早市生まれ、海軍兵学校生として江田島で8月6日の広島、続く9日、故郷の長崎に原爆の投下を知った。戦後、長崎医大で医学を修め、終生地域に密着した医療に専念した。とりわけ原爆症の認定に力を注いだ方だった。

この人がありてこの句、小林氏は納得した。そこにはもう先行句、類句などの話は遠くに霞んでしまっていた。小林良作氏によって句碑に魂が入れられた。その追跡作業を後押ししましたのは「鴻」の編集部だった。忘れられない八月の句となった。

同人作品



内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌 松原智津子

リコーダー初めて吹く子木の芽晴れ
新しき戒名墓誌に桜時
しらべと喪の花溢る立夏の夕
葉桜や遺愛の杖に頭文字
宇宙ごみ散らばる夜空リラの冷

札幌 岡本敬子

きな臭き日々重なるに目借どき
みどり摘む梯子の米寿達者なる
入植の碑の黝ずめり花は実
に倒れ木の崩るる卯の花腐しかな
森の冷えあつめ上溝ざくらかな

札幌 濱谷和代

木の芽時天地返しのトラクター
佐保姫のピンクのベール吉野山
百幹のエルムの風や延齡草
棟上げの檜のにはひ青葉風
薔薇手向くひととごとの別れかな

札幌 大内和憲

荒行の錫杖に尽く玉の汗

鯉東風まかせの皺が網曳けり
当直医の白から白へ更衣
とりどりの園児の弁当初蝶来
蜜蜂の地を這ふのみや襟裳岬

札幌 紅 露 恵 子

春愁ひ古木の虚の底の底
一枝より始まる夜風花の雨
乳色の空と湖花曇り
空色の代田は湖へ続きけり
細波を軽くひと跳び水馬

札幌 玉 田 瑞 穂

漁師町光らせ白雨海に入る
玫瑰や砂に拡ぐる大漁旗
初夏や時計廻りの楡の影
雲海の渦まつはれる岳樺
○雲に居てケルン積む手の濡るるまま
黄昏の雪溪人を歩ましむ

札幌 大内 マ キ 子

黒牛の角天に向け遠郭公
蝌蚪生れて水の命の旺んなる

東雲の光を引けり揚雲雀
母の日の母ゐる幸や延齡草
蜘蛛の囿や日をからめては動かざる

江別 佐 藤 哲

名水となりて噴き出す雪解水
吹越の畑に震へて耕せり
行く道のまつすぐなれど遠霞
大地蹴る轆馬の息ぞ春をどる
田水張り一村すべて水鏡

苫小牧 林 陽 子

赤松の老いに添ひをり山ざくら
花散るや鉄扉錆び付く御料馬場
木も草もはえぬ火の山夏来る
清水掬む一口飲めば里の味
湖をきて花桜桃の香に触るる

苫小牧 落 合 裕 子

春耕や黒き大地に畝長く
終漁期間近太りし北寄貝
○桜咲き梅はまだかと問はれたる
谷地原に二つかがまる座禪草

囀や幹守る網に長寿札
山積みの草餅の香や七回忌

東根 奥山テル子

苦小牧 榎

美幸

○暖かき土に乳伏せ牧の牛
火山岩を抱く走り根山桜
立て札に治療中と老桜
綾子の匂ふと口遊みチューリップ
支笏湖の流木白し夏霞

湯沢 小松 敏郎

薇を揉む都度背の子も揺れて
堤防の蛇籠突き抜け芦の角
一瞬の電蔭の葉を網にせり
蓼蛙澄みし代田を掻き乱し
杖突きて妻裏山で嫁菜摘む

井之頭公園

鶴岡 阿部月山子

水際を埋むる花著莪弁天堂
上堂の新命和尚風光る
雛僧の禅問答や芽吹き晴
法戦の堂を響動もす竹の秋
田植祭五風十雨を祈りけり

白梅や思ひの深き辞令受く
新しき名刺を胸に初登庁
一つ身の手縫の浴衣産見舞
紐飾り背守りも美しき子の浴衣
跳ぬる子を宥め浴衣の揚げを決む

上山 森 和子

この先は風の踊り場藤の波
藤の花山はゆらゆら立ちあがる
紫木蓮散り浮く水に鎌を研ぐ
苗植うる背に山鳩の声木霊
歟の柄の芯の湿りや夕薄暑

新潟 佐藤 三男

恐山鴉が太る祭りかな

○大祭や巫女の皺声妻の声
千年の杉の参道蛇睦む
米寿過ぎ夢の続きの朧かな
護摩堂山登りきつたり心天
軍馬碑の背するすると瑠璃蜥蜴

新潟 佐藤 雄二

わらわらと蠟螂生まれ子のポケット
遅桜ボート伏せある潟の茶屋
薫風や藍一色の初句集
轉移なく四年目に入る桜餅

新潟 高橋 ひろ

手の上に蝶の影さす菊根分
つちふるや柩に従きて海を見る
万代橋を四度渡りし日よな曇
万太郎忌傍線消せぬ図書を借る
牡丹剪る礼肥用意して置いて

南魚沼 森山 暁湖

八海山の雪形愛でてゐる足湯
滔々と天よりひびく雪解滝
大鋸屑に初夏のかをりよ越後杉
畑打つ予後の足腰ふんばりて
小屋を出てまづ土を掻く羽拔鶏

宇都宮 阿久津 勝利

釣船を沖へ沖へと夏はじめ
夏に入る水平線に沈む日も
田から田へ水光り出す立夏かな

夏来る銀座通りの帽子店
崩落の天守の屋根に草青む

芳賀 大村 かし子

新緑や筑波の二峰夕日染む
子育ての鴉植田に餌さがす
青嵐山と積まるる杉丸太
のびのびと住处分けられ目高の子
みどり児の母の香りや聖五月

佐野 亀田 やす子

一心にみがく湯殿や建国日
畦川の水嵩増せりつばくらめ
小蜂ふれ動き出したる花筏
胸乳まで伸びるすかんぼ塩の道
○しじみ蝶ときには高く飛んで見よ
胡桃咲く道鏡塚の裏の道

佐野 増田 幸子

下野の起伏のゆるき畑を打つ
竹散るや八嶋の濠のしづけさに
空色のネモフィラの丘卵浪晴
広域農道逃げ水一瞬青となし

家々を巡る清流麦の秋

佐野 駒形祐子

青嵐三霧一山裏返す

芥子粒のやうな虫にも命かな

菩提樹の芽吹きのとおり鑑真碑

若葉道東山道はこのあたり

雪解山空のゴンドラすれ違ふ

佐野 加藤季代

牡丹へかがめば息の通ひけり

降らずみの空白牡丹香を放つ

せせらぎを眼下に峽の鯉幟

空に触れ朝風にふれ棕櫚の花

その花に触れてもみたし泰山木

佐野 鍋島広子

薬師寺跡の空の広さや蝶の昼

囀や木立の中の道鏡塚

沼尻に目玉浮かぶる牛蛙

よく動く赤子の手足薄暑かな

城沼や鳩の浮巢に鴨のれり

佐野 阿部 澄

薜戸を上げし御堂や風薫る

夜匂ふ一輪挿しのライラック

狛犬の碧き玉眼新樹光

蓮浮葉白き和毛の吹かれをり

睡蓮の葉だたみを鯉押し上ぐる

足利 大木 茂

菊根分素性悪きを放りけり

新樹清し朱のトタン葺く斜陽館

津軽富士の雪解水浸む荒鋤田

雉子に明け雉子に暮れたり谷戸暮し

すれ違ふ人皆若し夜の藤

土浦 松尾 芳子

人だかり親ふくろふの動かざる

木洩れ日を上りつめたり藤の花

けもの道抜くるや明き菖蒲池

噴水の高さちぐはぐ鯉の池

蛙田の闇の広がる車窓かな

さいたま 手島 南天

艶めける花の下なる女神像

憲法を玩ぶなよ 聖 五月
垂直に揚羽の翔くる子供の日
日の出時蜘蛛の跳ねとお水田かな
朝な朝な棗若葉を愛でにけり

さいたま 山 本 右 近

囀や神庫深くに起 請 文
消え残る事故の白墨花は葉に
パスワード書き留め八十八夜寒
薫風や三時に掛かる「ゆ」の暖簾
一卓のみな喪服なるピアホール
○棘のある魚釣り上げぬ夏帽子

さいたま 岡 崎 春 菜

道草の姫紫苑挿すジャムの瓶
さみどりの風や光や聖 五月
赤ん坊生まるる幸せチューリップ
べそかいて行くランドセル花の雨
囀りのまた違ふ声 榆 大 樹

志 木 中 村 千 久

母逝きしあの日もここに藤の花
ためらはず光ちらして初蝶来

マネキンの裸形ま白き立夏かな
マタニティマークまばゆし聖 五月
白南風やラピスラズリの髪飾り

所 沢 三 好 か ほ る

巢作りの小枝啞へて 四十雀
薔薇展のまん中にゐて香にむせし
母のごと白きあやめの咲き出せり
理科教師咲かすまつ赤なアマリリス
櫻葉に集ひて歌ふモーツァルト

所 沢 水 野 加 代

菜の花の風に歩けば涙目に
花網の五色にふれて春惜しむ
下総へなんぢやもんぢやの花の頃
日時計の影は真北を楷若葉
多羅葉の花 禅 寺の 五 月 かな
○薫風や水の色なる鯉の稚魚

所 沢 森 岡 恵 子

藤房の色濃く揺るるとの曇り
無住寺の丈つくしたり松の芯
若葉風目も鼻もなき地蔵尊

神の鶏樹上に眠る四月尽
緑さす千手観音御開帳

入間 山口 素基

百済野の小さな寺の葱坊主
母の日の暈を這へり朝の蜘蛛
はつなつや仔牛が首を出して鳴く
葉桜や砂丘に風と足跡と
新緑や秩父の神へ婚の列

千葉 田中 道江

○ひるがへり島のつばめとなりにける
二丁艚のきしみ小島の揚雲雀
葉桜の囲む校庭からつぽに
新緑の路地にひと竿日章旗
縁側に足ぶらぶらや子供の日
草叢を雉子の群青見え隠れ

酒々井 竹澤 竹里

藤一樹六百疊の天蓋に
富士を背に桜海老干す田子の浦
桜えび浜はあけぼの天日干し
母の日や逝つてしまへば摩耶夫人

小流れの庇となりし青胡桃

佐倉 内海 保子

写生子の画板に蟻の立往生
いつせいに茅花そよげる雨の前
能登びとの柿渋染の夏帽子
この辺り昔海辺や白日傘
太々と夏越祓の墨書かな

佐倉 大内 佐奈枝

杉菜生ふ石ばかりなる城遺構
種残すらしき一列葱坊主
弁当の割箸白き薄暑かな
更衣にはかに伸びし手足かな
谷保天神鳥居にならぶ羽拔鶏

佐倉 三屋 英俊

妙高山に馬の雪形机さす
チエンパロのバツハ弾んで聖五月
炭酸のチェリー光つて新樹の夜
大波のあとのさざ波藤の花
大蛸蛭や巻尺不意にまき戻り

四街道 奥

太雅

亀の子の歩みに小さき泥けむり
口笛で啼けば鶯応へけり
田植機のひと日の泥を洗ひ上ぐ
車なき銀座通りを夏燕
葭切の咽くれなるに鳴き通す

船橋 大坪 貞子

芍薬やいつもの漢方棚の上
病院へあわただしきや青葉闇
よなほこり困るや憲法記念の日
縄ばりをあらそふ鴉三社祭
肩を打つものは菖蒲よお湯の中

船橋 山下 良江

磨崖仏の大きかんばせ新樹光
楷の木の煙のごとき芽吹きかな
筍を赤子のやうに抱き来し
桐の花湯屋よりひびく桶の音
消防士の登る訓練花の雲

船橋 大山 春江

遠き日の仄かな甘み桑葚

昼暗き御成街道時鳥

母の日や母に似てきし太き指
風孕み形まざまざ蛇の衣
眼裏に青きひかりや蜥蜴消ゆ

船橋 赤堀 洋子

春筍や同窓会が喜寿の日に
能筆の子規の絶筆風薫る
まくなぎの草を転げる高さにて
泥の好きな燕集まる田んぼかな
庭園のまだ皮脱がぬ大竹の子

船橋 久保村 淑子

斎場の行きも帰りもつばくらめ
初揚羽門を入り来てつと去りぬ
びちやびちやと鴉の歩く植田かな
喪の帰り赤城の裾の山法師
馥郁と黄色の薔薇は黄色の香

船橋 大坪 あきら

新緑の干潟きらきら鳥のこゑ
根上りの松をくぐりて白つつじ
薬の日松ぼつくりの坂をゆく

薰風に包まれ朝の声をし
ふるさとの空や枇杷の実熟れはじむ

柏 山本とく 江

百日紅の洞にすみれの濃むらさき
弁天にはじまる流れ昼蛙
音立てて木の間を抜くる黒揚羽
夏つばめビル高ければ高く飛ぶ
姫入水の池睡蓮の紅一つ

柏 松原三枝子

葱坊主弾け音符のとび出せる
たんぽぽや絵本を抱き子の駆くる
蛇莓の群るる通路や美容院
川白く濁る筍流しかな
しなやかに風を流して藤香る

柏 内田郁代

落若葉無人のロシア正教会
八重藤の芳香に寄る人と虫
大利根の土手の高さに桐の花
庭に来て夏鶯の鳴き放題
刻み葱またつき足して泥鰌鍋

柏 古川京子

鳥帰り波音かろくなりにつけり
初夏の五浦の波の音透けり
夏鶯六角堂をわがものに
ネモフィラの丘へ立夏の海の風
筑波嶺に小さき笠雲夏来る

流山 沢辺たけし

鷹の声芽吹き森を貫けり
春愁やまた聞きのがす左耳
牡丹の襷の奥なる冷氣かな
富士塚の溶岩新緑に染まりけり
関伽桶の柄に触れるるや藤の花

流山 穂苅照子

たんぽぽの絮に穴あけ通り雨
着ては脱ぐ上着一枚花は葉に
ふち少しめくれて走る浮葉かな
母の日の雨に枝葉は傘となり
○睡蓮の開く花芯に水ひかる

浦安 田中幹也

将門の闇の陣跡蚊喰鳥

母の日や母の持仏に日の淡きをちに紅こちに白銀ひつじぐさ紫陽花のひとつ開きて水明り父兄を十年越えし若楓

東京 内藤 恵子

さくらさくら今日のさくらを忘れまじ会果てて沖縄もづくすすりけり若葉して櫟の柄の赤きかな沢蟹のはけ水の藻をかぶりたる若葉谷保天神の杜鳩と混はる神の鶏

東京 谷田 部 栄

着流しの西郷像や夏隣○客寄らぬ大道芸や鳥疊牡丹に屈み五重の塔に反る櫂の木のおつきらばうな芽吹きかな夏に入るサドル一寸高くして山鳩のよく鳴く母の日なりけり新緑や行きたい方へ子は走る万緑へ手足けり上ぐ乳児かな

東京 木内 徹子

隣人老い久々語る卯の花垣つゝじ大輪水音たえぬ給水庫夏来ぬと朴の蓄むを見上ぐかな

東京 須賀 允子

緑蔭学習院にて二句にしづもりてあり乃木館乃木院長知らぬ学生亀鳴かむ悪童の裏返す亀鳴くごとし向島百花園薬ゆる空襲耐へし大銀杏しもたやの軒に色づく枇杷あまた

東京 降幡 加代子

十葉の埋め尽す松の廊下跡振り花高くくと競り合ひぬ筍の顔出し初めし皇居の中ミズカンナ枯れてくの字に折れてあし二の丸の藤房一尺程もありぬべし

東京 名和 政代

日曜のみ開く床屋の鉄線花武蔵野の橋のはじめに花胡桃赤煉瓦の一号館に桐の花十字架の傾ぐ廃屋蔦茂る

柿若葉の陰に干さるる柔道着

東京 山 本 絢 子

四阿に水かげろふや若楓

お茶の井に水湧く力夏来る

新緑の山分け入りて子の新居

曾孫と喋る片言新樹光

母の日の土産は八ヶ岳の花擬宝珠

東京 藤 田 裕 子

法要を待つ広縁や糸桜

杉玉の黒み増す軒菜種梅雨

神田川隔てて桐の花匂ふ

薔薇の家木戸内側へ開けあり

半袖の肘の白さよ夏来る

東京 赤 松 郁 代

不忍池に枝垂れ柳のふれにけり

鴨引いて不忍池の空にごりたる

神の鹿しだれ桜の包みたる

おぼろ月すり寄る鹿の角ぬくし

亀鳴くや夫とつなぐ手ほぐれゆく

東京 島 野 ひ さ

一駅を歩いて帰る花の道

吹く風の匂ひ濃くなる五月かな

沼暮れてなほ明るかり燕子花

朝の日に白き粉を吹く今年竹

母の日やきまり文句のありがたう

東京 佐 藤 晴 子

新芽立つ芭蕉の影のみづみづし

花棗風木舎の庭なつかしき

芽山椒播る香のあふれ尼が寺

軒菖蒲格子戸洩るる謠かな

西郷どん見上ぐる子らの夏帽子

東京 加 賀 葉 子

夏山を背負ひ大仏前かがみ

引潮に拾ふ紅貝小さき穴

建国日網をつくろふ漁師かな

足たたばと子規の短歌や初揚羽

庭木の枝払ひて風の新しいき

東京 久 留 島 規 子

薦若葉纏ふ明治の赤煉瓦

腿太き車夫駈け抜くる糸柳
鏡石春らんまんの日を撥ぬる

相撲取鬢付け匂ふ薄暑かな
夏来る夫に特製握り飯

小平 吉村 光子

茱萸咲いて雌雄あること教へらる
虫麻呂に狼藉ゆるし繡毬花
片栗の束の間に消ゆ花も葉も
黄砂降る豊葦原を余すなく
新緑やまぬがれがたき核と地震

立川 正田 華子

ぼうたんの苔ほぐるる誕生日
虹色の壘にあふるる花アカシア
新しき土を花壇に菊芽挿す
○たかなの出づるけはひや罇あまた
遊園地幼なの拾ふ桜の実

町田 吉中 愛子

尼様にお衣替ふる立夏かな
万緑に染まる硝子戸写経の間
牡丹の緋には緋の傘ランデブー

しいいいん落葉松林の二輪草
伊代松本城才次の立ちし天守や松の花

町田 広瀬 俊雄

碌山の裸婦の乳房や新樹光
文覚の眉根けはしや青嵐
穂高嶺の岩に雪溪くひこめり
岩魚焼く嘉門次小屋の四代目
羊蹄や花をしごけばぎしとなる

青梅 小林 珠江

花鉢芳漬物の樽干してあり
芋植ゑてずり落ちさうな峽の烟
鳴きながら枝移りする四十雀
夏燕洗ひあげたる消防車
青梅の無垢の一粒手の窪に

青梅 谷口 直樹

うどん屋の妻の畝立て柿若葉
足裏を冷やす溪間の夕河鹿
老鶯や日の出迎ふる水神社
洋館の歴史引き立つ薔薇の花
盛り塩へ落ちてはためく火取虫

横浜 仲山秋岳

宴會に方言の声町薄暑
扇風機店のくらきにうなりをり
図書室に寢言の声や夏はじめ
亡き祖父の羽織ありけり祭笛
窓際に舞ひあがりたる春落葉

横浜 榎本文代

婚の日や木苺の花咲き満ちて
花嫁のブーケにはじけしやぼん玉
雉子鳴いて夕暮の山大きく
日本地図ひらきて憲法記念の日
これよりは甲斐の空なり桐の花

横浜 山内なつみ

鶯の高音花嫁出来上る
烏瓜の花のかざしや夜の足湯
匂ひ立つ山積みパイン一つ買ふ
卯の花腐し首を回せば音のして
葛の根の太きを飾り葛餅屋

横浜 浅井敦子

春の日や誕ながながキリンの子

たんぼぼの絮毛や猫の耳うごく
文学館の裏山へ落ち恋鴉
晩春の美容院に聴く円舞曲
わらんべが臍まさぐつて端午くる

横浜 西本才子

永き日の探しあぐねて補陀洛寺
檜皮葺の門開けてあり藤の花
膝丈に蛸壺積みめり藷葛菜
小綬鶏や踏みしめ下る砂利の坂
○新聞紙ぬれ朝採りの筍着く

横浜 川越昭子

目黒川網ですくひし花筏
庭広き沼津の町や夏みかん
様変りしたる生家や夏隣
花吹雪赤飯供ふ馬の墓
銀行の底を占むる夏つばめ

横浜 久松和子

笠懸や岬の波のしづまりぬ
薄羽蜉蝣月満つ刻を湧きにけり
奥入瀬の飛沫を浴ぶや苔の花

緋目高の頭つつかれ深きへと
剪るたびに香り放ちし野路かな

横浜 寺沢千都子

出刃を研ぐ立夏の水を五六滴
花嫁の細き靴先芝青む
小海線ホーム短かや桜の実
さくら貝指細かりし姉なりき
葉桜や夫の歩幅のせまくなり

横浜 大橋雅子

雨模様のを空を支へて花水木
花蜜柑友とはぐれし遠き日よ
白く招くハンカチの花高枝に
溪渡るロープ二列や鯉のぼり
バーベキューなんぢやもんぢやの花の下

横浜 福田雅子

メーデーを言ふ人もなく空晴るる
春鴉庭師のおやつ奪^はひて翔ぶ
家族二人新玉葱を買ひすぎて
鯉幟干されてあはれ昨夜の雨
はしり蚊に刺されしひとの果報かな

横浜 柳澤宗正

ホバリングしては素つ飛ぶ熊ん蜂
パレードの臍出しルック夏来る
著莪の花竿竹売りの声徹る
法螺鳴らし走る行者や雲の峰
夏潮の満ち来る運河船洗ふ

横浜 山崎郁子

閃光や一氣に崩る白牡丹
夏埠頭貝の張りつくだるま船
苗床に甘藷の新芽たちあがる
○養蜂箱今朝は杏の花の下
朝の椀に散らす通草の新芽かな
二輪草絶えずひらきし安堵かな

横浜 田賀樸恵

畳皺残して遊ぶ鯉幟
初夏や何処に佇ちても水光る
口遊むタンゴの調べ葱坊主
芥子の花風の形に揺れるたり
初螢逢ひたき人は逝きし夫

川崎 山口千代子

地の祭放り出しては浅草寺
田崎分水
水喧嘩救ひしところ葉桜に
風呂好きが風呂屋に通ひさみだるる
朝寝して遺影の夫に笑はるる
花びらのひらりお酒の紙コップ

川崎 新妻 奎子

ジャカルタのチョコを賜る夏初め
踏むまいぞ朱を極めたる蛇莓
睫毛長き夫の横顔若布汁
山藤のばさりと谷戸に現るる
木蔭にはいつも風あり鯛釣草

逗子 卯辰 美苗

神饌の米いたたくは雀の子
母の爪いつも短し胡瓜揉
ペン胼胝の無き若者や柏餅
更衣防災リュック確かむる
富士山や蝦蟇合戦のキャンプ村

横須賀 武井 美代子

薔薇園のベンチいづれも海へ向く

米寿てふ身がなるな齡夏帽子

ぼうたんに大風やまぬ日なりけり

○薰風や鍵穴に鍵忘れあり

卯の花や谷戸は水気をたつぷりと

板橋はつぎはぎ板や遠郭公

茅ヶ崎 三澤 治子

背伸びせる童女の注ぐ甘茶かな

夜半の雨上り晴れ晴れ梅若忌

一本の木より紅白ぼけの花

富士山見ゆるなんぢやもんぢやの花の寺

亡き母の杖まだ使はず青き踏む

茅ヶ崎 三澤 いづ子

麦の秋阿夫利嶺雲に覆はれて

水甕の蓮の巻葉の二三寸

アラハにて二句
オペラ果てし夜の石甕白夜めく

在りし師とミュシャの絵を愛づ若葉寒

皇妃住みし白亜の館橡の花

伊勢原 佐藤 和子

幕間の軽きざわめき春の宵

たよりなき菖蒲となりし仕舞風呂呂

しみじみと母の日のわが手足かな
花海桐并財天に恋の絵馬
ぎしぎしに立てば胸乳の高さかな

松本 中條 今日子

餓鬼岳を巡り流るる雪解川
まどかなる月の顔出す夕桜
筍の庭に顔出す児等のごと
田植済む月の迷へる棚田かな
スペインの皿壁に掛け夏来る

静岡 大村 峰子

揚雲雀背ナの子婆を蹴りに蹴る
赤翡翠の声に山気の震へけり
老鶯の声に家系のありにけり
白牡丹芯に薄紅刷きし程
一匹の外れて行くや蟻の列

静岡 曾根 満

園児らへひと日早めの花御堂
耕や石に当たれば石拾ふ
佐保姫や鑑真さまの眼の動く
春なれや犀川に干す紅の傘

老鶯やこれより林道坂がかる

静岡 藤原 千代子

にぎやかや燕の通ふ美容院
波形に刈り上ぐ槇や垣手入れ
畝畝のふくよかなるよ茶の新芽
寸余なる胃佛や若緑
英彦師芳子師の声花の頃

静岡 海野 勲

介護所の塗り立ての壁初燕
○吾が植ゑしかたかご三つ咲きにけり
飛入りの媼よろける花の宴
介護所に友の名残の百合匂ふ
春眠の枕に響く猿威

静岡 海野 みち子

初燕せつせと庭の苔運ぶ
蓬摘む猿威しに脅されつ
緑さす湖を背に夫婦句碑
朝採りの春子の袋くもりたる
麦秋や納屋に煤けし箕と篩

静岡 宮崎知恵美

海に向き花かたくりの反り始む
ふらここの鯖の匂へる杣の村
遅桜山に薄衣かけしごと
囀を飛ばして風のがうがうと
花かたくり足裏に丸き石畳

静岡 宮崎みゆき

湖辺の介護施設に燕来る
夏空やくぎ打つ音の重たくて
林道に香り零せり針槐
薫風の通る三和土に機の音
雪溪の白山見えて空広し

静岡 荻野加壽子

木洩れ日を揺らすチェロの音夏近し
やはらかに結ぶ靴紐蝶の昼
修司忌や人のかたち人に人の影
美濃紙へ墨のまじはり夏きざす
肅肅とすれ違ひたり蟻と蟻

静岡 長島

子の顔に似たる雛を上段に

操

村人の傘の行き合ふ花祭
春彼岸過ぎて三日の雪となり
診察を待つや窓辺の白木蓮
竹の秋静かに老いの誕生日

静岡 小川明美

片膝を立てて種芋選りにけり
テノールにアルト応ふる昼蛙
猪垣に囲まる櫛の芽吹きたり
田鼠化して鶉となれり断酒会
蛇穴を出づや開かずの長屋門

静岡 藤本節子

袋掛富士は裾より晴れ上がり
竹皮を脱ぎ一節の真青なる
名を太く値札小さく植木市
一人来てふらこ揺らし帰りけり
春陰や丈の詰まりし母の杖

静岡 大長文昭

夏燕村を見下す墓十基
川蜻蛉はがねのごとき胴ひかる
盆栽の鉢より鉢へ蛇の衣

シヨートパンツ薔薇のタトウの女かな
巢の口に弁慶蟹の目の動く

静岡 加山 ひさ子

行く春や石踏む音のくぐもりて
蛇の声全身花粉まみれかな
塵もまた煌めくものや聖五月
○蜥蜴出づ困りきつたる貌をして
矢車の不意に回りし夜の黙

富士 神田 美穂子

御殿場秩父宮邸 二句
宮様の防空壕や著莪の花
梁太き秩父宮邸春炉焚く
こひのぼりここいら十戸同じ姓
鉄線の一の花のうすみどり
百段の上の青空雪解富士

富山 若島 久清

辛夷咲く岩赤裸裸な山壁に
石楠花の十年がかりの奮揚ぐ
古茶を入れ連れ合ひと過す卓袱台で
師の郷里訪はば田植の真盛り
田植済み気の安らぎに庭いぢり

射水 成瀬 真紀子

海越しの立山淡し春の月
水ゆるき運河縁取る花の塵
俱利伽羅の峠へ谷へ花吹雪
筍の鍋ごと回る結ひの昼
妻恋ひの志功の歌や余花の雨

金沢 岸川 素粒子

桃の日や食に換へたる雛人形
彼岸西風すがるものなき五逆の徒
風孕む三輪の大杉地虫出づ
寸鉄を帯びぬ修羅場や利休の忌
月朧馬齢重たき誕生日

金沢 田村 愛子

鏡花碑へ八十八夜の水の音
日蓮像数珠より花の雨しづく
梅花藻や河端の水でくらす里
川幅をせましせましと鯉のぼり
鉄舟の書の濃淡や夏襖

金沢 新保 ふじ子

心地良き八十八夜の水の音

咲き初めしぼたんへ風の強きかな
青蛙五指を広げてかしこまる
ろくろ廻す音かろやかに五月かな
リラ冷の夜はのんどにマフラーを

金沢 井村和子

耶蘇谷へ長き尾を引き夕雉子
耳もとに今も師のこゑ花は葉に
旅の荷を解くにこぼるる花の屑
茶柱を愛しむ二人昭和の日
見下ろしに氣比の松原青岬

金沢 中條睦子

古墳径筍掘りに出会ひたり
若葉して島に二つの古墳穴
かたかごの花や羚羊通ふ径
人の計の飛び込んでくる桜冷
華鬘咲き句碑の師の文字なつかしき

金沢 今越みち子

教へ子に草笛聞かす遺蹟かな
松本城葉桜塞ぐ石落し
潮騒の宿に虎魚の魚拓かな

山藤や犀川ダムの深みどり
雛仕舞ふつとに寂びたる座敷かな

金沢 伊川玉子

野外能待つ間濠より墓の声
夏雲の影移りゆく竹生島
初蟬や物干し台に笹乾く
けまん草咲いて師の墓詣でけり
ぶらんこに誰もゐなくて山鳥

金沢 伊藤美音子

燕来る藩の板前住みし町
豆の花鳥の足あと水辺まで
巻貝の内るとき色春うれひ
青しぐれ鹿の食みあと著き幹
寶頭盧の膝の剝落さつき闇

金沢 高田たみ子

上人の袈裟掛けの松百千鳥
忌を修す燕出入りの生家かな
村挙げて守る観音若葉風
嚮かかる琵琶湖の春を惜みたり
クルーズの揺るるにまかせ夏帽子

金沢 佐野和子

罇留め淵とありたり夏落葉
師の墓へ供華としたりし姫女苑
老鶯や台座の欠けし観音像
○白拍子の碑や木苺に実の兆し
小振りなるシスターの墓麦の秋
湾に添ふ十戸の部落茄子の花

金沢 後藤桂子

都恋ふ式部の像や緑さす
王朝の色を濃くして藤五尺
柳絮飛ぶ方一丁の式部庭
潮騒や風に膨らむ袋掛
白山に雲の翼や五月晴

金沢 豊田高子

麦は穂に遠の白山青みたる
親の匂ひ声立ち上がる燕の子
水の町新樹明りに手漕ぎ舟
老鶯や風の翳りの軍議石
潮濡れの畑の石垣蜥蜴の尾

内瀬 塩井志津

種下ろす雪形の鳥まむかひに
刀傷のお化け灯籠亀の声
武蔵野に先師を偲ぶ暮春かな
榎植咲くその大方は徒花に
老鶯や奥の院まで七曲り

七尾 谷渡末枝

クレソンの小流れ五月の空映し
雉子走る縄文土器の出でし畑
筒鳥や大きな水輪が隠沼に
ヴィーナスの腰被ふ布涼しかり
山姥のみち通せん坊の青大将

敦賀 石田野武男

春愁や浅瀬に拾ふ虚貝
○九頭龍の風を鵜呑みに鯉のぼり
虹を生む百四丈の男滝
顔の泥洗ひ深田を植ゑ終る
湿原に葦切こゑをしぼりけり
道産馬の産声にゆれ若楓

敦賀 山 本 麓 潮

蓮如興お発ちの声の澄みわたり
船べりを付かず離れず飛魚の跳ぶ
陶工の眠る甕墓齒朶青し
産小屋に瀬音の絶えず瓜の花
蛸壺の浮標揺れ止まず浦日和

敦賀 山 本 み ゆ き

牛若の背くらべ石や竹を伐る
釣忍かつて遊女の棲みし家
少女海女初潜りする朝曇
石楠花や登美子遺愛の髪かざり
青田風曾良の卒塔婆へ燭ゆらす

敦賀 倉 谷 紫 龍

空駆くる唐人風の赤き舌
隠し田の泥をかき分け田螺とる
赤鬼のお練りの花会吉野山
囀りや文字のやさしき綾子句碑
峠越ゆ蓮如下向の別れ霜

敦賀 倉 谷 ま す 美

難流す童女着飾る水あかり

鶯や旧家に桐の小鳥籠
板に干す洩染の布山桜
春愁や醪つぶやく醬油蔵
花林檎浅間の風に香りけり
徳島 福 島 吉 美

寄せ書きを宿屋に残し遍路発つ
音たててあひるが食べる桜しべ
茶摘み女となりし役場の五人組
薫風や堂の華鬘の小鈴鳴る
芭蕉布の袈裟かけて出る枕経

徳島 村 上 和 義

分校の卵の花匂ふ坂の道
夏場所や砂嚙む足の指尖る
空海を偲びて巡る青岬
鮑海女胸乳ゆたかに浮き上がる
赤ちやんの禰宜に抱かれし泣き相撲

室戸 安 岡 み さ き

長杓海難仏へ山清水
微匂ふ狭き通夜洞香を焚く
白々と軍艦岩へ卯浪寄す

磯波も濁る卯の花腐しかな
荒磯道杓添へてあり岩清水

室戸 仙頭 宗峰

遍路宿見送りに出て拝まるる
怒濤なす峰寺の岩や風薫る
新緑の風思ひきり深呼吸吸
岬の山打ち越す海霧の滝となり
詫びながら剝ぐ玄関の燕の巢

具 川 口 崇 子

花冷や走れば揺るるイヤリング
花の窓磨き上げたる時計店
立ち上がり座り直して巢の鴉
かげろふや岩の迫り出す峙山
すかんぽを折れば昨夜の雨匂ふ

那 前田 貴美子

奈良ゆみさんコンサート二回

黒髪ゆたかに春宵のメシアン
恋歌へ肩より落す春シヨール
若夏やこの日のための風が吹く
砂こぼす猫の踵や芒種南風
○梅雨入の雷トーストを焦がしたる

配車待つ福木落花の香にむせて

那 大 湾 宗 弘

閩魚トウイユの縞あざやかに若夏来
小満や髪高く結ひアジアの子
ボンと抜いてラムネは夏を溢れさす
青時雨木棉さわたほたほた土の上
床下は蟻地獄なり坐禅堂

那 比 嘉 半 升

冊封使の港ふくらむ小満南風
おもしろ碑の文字のもつれや青葉影
黒南風や岬めぐれる雨柱
がじまるの髭根ばつさり梅雨寒し
地すべりの跡赤土の鉄砲百合

宜野湾 吳 屋 菜 々

うりずんや厨の手拭き花柄に
家居にして胸塞ぎたる昭和の日
高砂魚たかくんの黄色一閃夏来る
若夏の久高島だか白砂きらめける
カサプランカ匂ひ濃くなる夜更けかな

宜野湾 いぶすき

幸

鯛御輿干潟に大き潮の道
八丁蜻蛉草のそよぎに紛れたり
この道と決めて南へ蝸牛
崩れ壕へ垂るる一縷の蔦青葉
鉄砲百合学徒ら辿る隘路かな

西原 宮 城

勉

一島の接ぐ明易の海と空
試しゐる動体視力夏燕
潮の香のぬるりと鼻を走り梅雨
風葬の崖這ふ太根梅雨の冷
投げ網の扇開きや青嵐

豊見城 渡 真 利 真 澄

青葉風戦の記憶そこここに
音の無き山羊の反芻走り梅雨
雨籠り家中に沁む蚊遣香
○曉闇の月桃の花白磁色
夜一夜月桃の花しらじらと
糸蜻蛉つるみしままが機織場

俳句

8月号
予告

7月25日発売
予価(本体944円+税)

特別作品 有馬朗人・大石悦子・山西雅子

大 特 集

感動の焦点を

一物仕立ての俳句

▼総論 一物仕立ての醍醐味……… 仁平勝
▼季語別・二物仕立ての名句▼私と「一物仕立て」の名句

特 集

平和の礎と なつた俳句

「巻頭エッセイ」
深見けん二
関悦史

創刊65周年企画 忘れられない師の一句

シリーズ
「宇多喜代子の「今、会いたい人」第5回
「丹波竜のいた時代」(ゲスト) 足立洸(花石探集堂)

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖 秋

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<http://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <http://www.kadokawa.co.jp/>

同人作品の佳句

内海良太

桜咲き梅はまだかと問はれたる 落合裕子

「まだ梅の花を見ていないうちに桜が咲き始めているよ」と人に聞かれている。北海道では梅と桜が同じ時期に咲き出すのだらう。

芭蕉の句に似たような情景がある。へ山里は万歳遅し梅の花。掲句とは逆だが、梅が咲いているのに正月の万歳はまだ来ていない、というもの。「行きて帰る心の味」として解説されるが、似通った心の味があるだらうか。それとも梅の花を見たのに忘れてしまっているお年寄りなのだらうか。

暖かき土に乳伏せ牧の牛 榎 美幸

暖かくなった地面に太った乳房を押し付けるのは、乳牛の本能なのだらう。本能は生命の表出に他ならない。

「土に乳伏せ」の写生がいい。写生は「根底にある生命を写す」実相観入といったところか。表現は言葉に確かなモノの裏付けがあるといい、この句には確かなモノを通しての具体感がある。

客 寄 らぬ 大道芸や鳥曇 谷田部 栄

東京上野の公園広場での囃目だらう。二人の芸人がやって来て、一人はチョークで地面に円を書き、一人はアルミの輓

から道具を出して芸を始めた。通りすがりの人は横目で見ただけで足を止めなかった。チョークの男がサクラとなって大きな拍手をするが、効果はなかった。二人の芸人は道具を片づけてその場を去っていった。渡り鳥のように。

吾が植ゑしかたかご三つ咲きにけり 海野 勲

堅香子の花は種や苗から咲かせるのは難しいと想像する。

ところが井川の海野さんは種から見事に咲かせたようだ。「今年には三つも咲かせたとよ」喜んでいる海野夫妻の感動がじかに伝わってくる。感動の伴わない報告的な句が多い中で、海野さんの自然観察の句はいつも感動に裏打ちされた本物の句である。

蜥蜴出づ困りきつたる貌をして 加山ひさ子

蜥蜴が穴を出て石の上でじっとしている。息を潜めて凝視していると、蜥蜴の顔付が何か困っているふうに見えてきた。対象への自己投入で、作者ならではの感覚で捉えた面白い句になった。「写生」の修練の過程での「何を見てとったか」、「何を感じとったか」客観、主観とすぐ思い浮ぶが、「根底にある生命を写す」。これを理解しておけば客観でも、主観でも良し悪しはない。

梅雨入の雷トーストを焦がしたる 前田貴美子

麗しい「うりずん」の時期を過ぎ、いよいよ梅雨入りの五月の上旬といったところか。梅雨前線が発達して時ならぬ大きな雷鳴が那覇の街を轟かせた。因果を言っているのではない。雷の強い電流はトーストを焦すほどだと驚いているのである。

第十五回「万象」新人賞発表

第十五回（平成二十八年度）「万象」新人賞は、中村弘氏（東京）に授賞と決まりました。十月二十九日に東京で開かれる平成二十九年度「万象」全国俳句大会で表彰します。

万 象 俳 句 会

受賞の言葉

「万象」新人賞を授与頂きありがとうございます。思いもかけない受賞に大変驚きました。

「万象」に入会して十年になります。はじめの五年はまだ勤めもあったので忙しかったこともあり、俳句の入口でうろろしている感じでした。勤めを辞めてからは時間が多少自由になり生活の中に俳句がしっかりと位置を占めるようになりました。最近では「万象」東京支部の俳句スクールの発足も日頃の疑問などを解消する機会ともなり、作句上の大いなる栄養源になっています。

これからは俳句の基本を大切にしながら俳句の詠み手・読み手としての幅を広げていきたいと思っています。

中 村 弘（東京）



略 歴

昭和二十二年十二月、東京都生れ。平成二十年「万象」入会、花桐句会、花桐吟行句会で三枝正子先生の指導を受ける。平成二十一年「りいの」入会、平成二十五年福田雅子先生の古典の会「桐の花」に参加、平成二十八年「りいの」同人、同年俳人協会会員。

現住所 〒170-0012 東京

都豊島区上池袋二-三十二

一七

中村 弘二十句

鎌の刃に冬青草の湿りかな
立春の米とぐ音の軽さかな
川筋に煙そひゆく野焼かな
蜜を吸ふ嘴ふれ椿落ちにけり
見上ぐれば喉の冷たき初桜
眼に慣れて四方にふゆる董かな
半衿の白き輝き紫木蓮
蛇と眼を合はさぬやうに学校へ

万緑を映して池の膨らみぬ
五月雨や堰より落ちて神田川
天瓜粉なかなか寝ない男の子
惜しげなく花落としつつ木槿咲く
通院の父に添ひゆく晩夏かな
明滅滅畢竟秋の螢かな
黄ばみたる秋の蓮に風の音
鴟高音枝に小さき揺れ残る
武蔵野を深く烟らせ秋の雨
末枯や木肌赤増す女坂
お花紙咲かせ万燈練供養
浄土へとつづく反橋冬もみぢ

第十五回「万象」新人賞の選考経過

第十五回新人賞選考委員会は、さる五月二十二日（月）午後一時より松葉会館で開催された。

新人賞事務局長の水野加代の開会の辞に続き、主宰が『万象』新人賞規約の趣旨である『万象』の作句活動に新鮮な息吹を求めるため、新人賞にふさわしい実力があり、将来性がある方を選んで戴きたい」と挨拶されると早速、座長の江見悦子氏の司会で審議に入った。

新人賞の選定は次の手順を踏む。

- ① 推薦人（主宰が指名）が平成二十八年度の「万象」誌の作品より新人賞に相応しい二名を推薦する。
- ② 事務局が、推薦された各人の作品を記したものや、推薦書等の選考に必要な資料を選考委員へ送付する。
- ③ 選考委員（主宰が指名）はそれらの資料、「万象」誌、各自が収集した情報等を予め吟味し、選考委員会に臨む。
- ④ 選考委員会では推薦された全員を丁寧に審議し、投票（今年度は二名連記）をもつて授賞者を決定する。

第十五回「万象」新人賞は中村弘氏（東京）に決定し、ただちに事務局長より主宰に報告された。

主宰は選考委員の労をねぎらう言葉を添え、快諾された。

投票結果

十名全員を対象に二名連記で投票

◎中村 弘 六票

高山 誓英 四票

島田 和枝 一票

松井佐枝子 一票

選考の対象となった候補者（十名）

氏 名	県 名	推薦数	得票数	氏 名	県 名	推薦数	得票数
島田 和枝（栃木）		7	40	鶴田 勝子（福井）		2	39
恒川 清爾（神奈川県）		5	39	高山 誓英（北海道）		1	37
中村 弘（東京）		2	38	宮本加津代（千葉）		1	43
長谷川信也（東京）		2	40	前川千代枝（福井）		1	33
松井佐枝子（石川）		2	39	宮田千恵子（福岡）		1	36

〔推薦人〕（十二名）

岡本 敬子	増田 幸子	山本 右近	中村 千久
内田 郁代	吉中 愛子	浅井 敦子	柳澤 宗正
曽根 満	井村 和子	山本 麓潮	前田貴美子
〔選考委員〕（六名）			
榎本 文代	中條 睦子	江見 悦子	亀田やす子
神田美穂子	沢辺たけし		

選考委員の発言の要旨は次の通りである。

島田 和枝

言葉遣いに無理がなく、日常の言葉で端正な句を詠んでいる。切れ字の使用がややパターン化してはいるが、詩情豊かな句が多い。句会の幹事をするなど積極的に活躍している。

恒川 清爾

「風」時代からの人であるが、若々しい句が多い。やや切れ字が少ないが、俳諧味もあり、丹念な身辺詠にすぐれている。万象賞、記念賞にも応募し積極的である。

中村 弘

六十歳代で、句歴十年弱。粗削りで未完成な点はあるが写生がしつかり出来ている。伸び代に期待が持てる。自分の句を追及する姿勢があり、試行錯誤しつつ努力をしている。これからの「万象」の力になれる。万象賞などにも毎年応募している。

長谷川信也

平成二十四年入会で「万象」での句歴は短いが、句材の幅が広く、完成度の高い句を詠んでいる。また俳句を楽しんでいる様子も見受けられる。一月号で巻頭になっている。

松井佐枝子

やわらかな詩情にあふれる佳句が多い。句材の幅も広く、精進しようとする姿勢に好感が持てる。季重なりの句もあるが、力量はある。十一月号で巻頭になっている。

龜田 勝子

伝統行事や寺など敦賀の風土に根ざした句を情緒豊かに詠み巧みである。やや固有名詞が多く、

高山 哲英

句材の新鮮味に欠ける。

北海道の風土や僧侶としての日常生活から生まれる句はどっしりとして印象鮮明。また句材の幅が広く、自分の心情をうまく句に託している。平成二十一年入会。六十歳代。今後の活躍が期待される。

宮本加津代

年間入選句数は四十三句で群を抜いており、実力のある人。身辺句が多く豊かな感性で言葉を柔らかに詠んでいる。叙情の句と言えよう。一昨年、同人への推挙を辞退している。

前川千代枝

地域の風土、行事などをよく写生しているが、やや固有名詞が多い。四句入選がない。句歴が短いのでこれからの活躍に期待したい。

宮田千恵子

新鮮な句があり、明るくいいきいきした感じが伝わる。事柄句が気になるが、十月以降良い句があり、これから期待。

最後に「『万象』新人賞規約」の見直しを求める意見や、新人賞に対する発展的な意見が交わされた。選考委員会は午後三時過ぎに終了した。

「万象」新人賞事務局 藤田 裕子

古川 京子

選考の感想

未知数の力

榎本文代

今年度の選考対象者は十名、その中で中村弘さんに注目した。粗削りな句も見られたが、「蜜を吸ふ嘴ふれ椿落ちにけり」〈見上ぐれば喉の冷たき初桜〉などの繊細な感覚、そして句の角度の広さに魅かれた。作品全体の安定感より未知数の力への期待感が強かった。そのうえ昨年は記念賞、万象俳句賞にも応募されている。俳句への積極的な姿勢は、「万象」を支える新しい力につながると思う。申し分のない授賞である。ほかに風土と日常のなかで幅広い句材に取り組んでいる恒川清爾さん、高山誓英さん。力量のあるお二人の今後に期待したい。

ナイーブな感性

中條睦子

新人賞事務局から送られてきた十名の候補者の資料に幾度か目を通して選考会に臨んだ。候補者一人一人について忌憚のない意見を述べ合い、そのうえで投票の結果、全員の選を獲得した中村弘氏に決定した。「蜜を吸ふ嘴ふれ椿落ちにけり」〈切れぎれに空に声おく蟬の声〉などナイーブな感性の光

る句に注目した。新人賞として、これからの活躍が大いに期待できる方だと喜ばしく思う。

投票をするにあたっては、句歴の長い人を新人賞の対象とするのは如何なものかという意見、すでに巻頭が決まっている方など、熱く議論を出し合った結果であった。

「万象」に新しい風を

江見悦子

候補者十名の中から、中村弘さんと島田和枝さんのお二人に注目して選考会議に臨んだ。

中村弘さんは〈見上ぐれば喉の冷たき初桜〉の新鮮な感覚、〈虻と眼を合はさぬやうに学校へ〉のおかしみ、〈鵲高音枝に小さき揺れ残る〉の確かな写生と、独自の表現力と共に幅の広さを身につけてきた。「風」以来の俳歴を持つ島田和枝さんは、〈樹々の影沈め湖呀え返る〉〈面打ちの水撒く路地や風生る〉等、自然と一体となった端正な詠みぶりで完成度が高い。今後も詩情溢れる作品を期待したい。

投票の結果、中村弘さんに決定したことを喜んでいる。

将来の可能性に期待

亀田やす子

候補者の中に「風」時代からのキャリアを持つ方、すでに巻頭に選ばれている方も推薦されていた。

候補者の一連の句は、選を通じて来ているので、環境や行

動によつて内容に違いはあるが、同じように安定した句が多く揃つていた。推薦人の多かった島田和枝さんのナイーブな句、恒川清爾さんの五感を働かせた句に好感を持ったが、もう少しインパクトを利かせた句が欲しかった。

その中で、中村弘さんの〈榎の芽のぐうちよきばあの浅緑〉などのような独自性に富んだ句に惹かれた。物足りない句もあつたが、六十九歳という若さに将来の可能性を期待した。

感性を大切に

神田美穂子

新人賞選考基準を頭に入れ送られて来た作品を何度も読み返し、句歴や推薦理由にも目を通し、中村弘さん高山哲英さんのお二人に注目して選考会に臨んだ。

中村弘さんの切り口の自在さ、日常の何気ない所から詩因を探り当てている自然体の句作りに好感を覚えた。〈天瓜粉なかなか寝ない男の子〉〈虻と目を合はさぬやうに学校へ〉この二句は自画像のようにも思われ、俳味のある句である。高山哲英さんの基本に忠実な作句姿勢に安定感を覚えるが、もう少し自在さが欲しいと思う。また固有名詞、地名を使つた句が多いのも少し気になったが今後に期待したい。

これからの作句活動に期待 沢辺たけし

十名の新人賞候補の年間作品を含む資料が家に届き、数回

に渡り読み返してみた。候補者の作品には個性は勿論のこと、地域性も有り、それぞれが一定水準以上の力量を持つていることが感じられた。

新人賞の選考基準には「新人賞にふさわしい実力を有し、将来性があること」という一文があり、それにより委員会では年間作品から推し量る力量以外のものも加味して議論を展開。その結果、中村弘さんとなった。

中村弘さんの作品に滲み出る感性と時折見せる型にはまらない独特な表現は魅力的であり、これからの作句活動に期待ができる。

新入会員のご紹介（平成29年6月現在）

本多 ひとみ（静岡）、須藤 國雄（埼玉）
東 順子（東京）、上野 恭子（栃木）
渡辺 智代子（東京）、丸本 祥夫（長崎）



俳句形式の器を満たした詩

武井美代子「あしかび」

小林 愛 子

— 米寿を期に満を持して世に問う第一句集 —

武井美代子さんが第一句集『あしかび』を上梓、昭和五十八年から平成二十八年までの三百八十句を収める。あとがきに「米寿を迎えた一つの節目に」と記されており誠にめでたい。

葦の芽の切つ先はまだ水の中 平21

俳 歴

美代子さんは昭和五十七年、最初の師小林康治主宰の「林」に入会した。「私の境涯俳句を真似しないで写生をして自分の句を」と、大変厳しかったという。二年後に同人。

大いなる伽藍の上の花曇 昭61

形代のはなればなれに流れたる 昭63

冬瀧の一縷となりて暮れにけり 昭63

河骨の片寄る風の立ちにけり 平元

地の冷えの茎をあをと曼珠沙華 平3

どれも確かな写生の句である。一句目は氣宇壮大。他の句もみな、中七の把握のすぐれた観照の句である。

平成四年、小林康治氏のご逝去により「林」は終刊となる。平成十年、神蔵器主宰「風土」に入会。主宰からは「インパクトのある句」を指導される。十四年、美代子さんはご夫君に先立たれた傷心から「風土」を退会する。平成十五年、滝

沢伊代次主宰の「万象」に入会。「万象」は「風」から引き継いだ「即物具象の写生」の理念を掲げ、その精神は次の大坪景章主宰、内海良太主宰にも継承されている。

美代子さんは、伊代次先生が以前小林康治先生の治療医であつたことに御縁を感じたという。十六年に同人、二十三年「万象創刊十周年記念賞」を受賞して今日に至る。その上平成二十一年に「一葦」に入会、島谷征良主宰の「格調のある己の顔をもつ俳句」の理念に導かれる。

生活俳句

この分け方に深い意味はない。小林康治師の「私の境涯俳句を真似しないで……」の一言や「林」、「風土」、「一葦」は波郷系ということもあつて、なにか素通りできなかった。

現代俳句辞典によれば、俳句用語の「生活俳句」のなかに境涯俳句も含まれている。境涯俳句は、狭義には作者の置かれた人生的境遇に裏付けされた句を指す。境涯俳句を広義にとらえた波郷であつたが、花鳥風月を詠む句とは対極的に考えられるようになり「惜命」がこれを裏付けた。

美代子さんは身近な句材を丁寧な詠んでおり、懇ろな生活態度を窺い知ることができる。

明け方の二の腕秋の来てをりぬ

平 10

剥がすごと起きあがりたり昼寝覚

平 18

母の忌の明けたるほたる袋かな

平 11

駅見えて筍つつみ直しけり

平 14

月の椅子ひとつ残して夫逝けり

平 14

背になじむ柱のありて夕端居

平 15

寒晴れの海をそびらに真竹割る

平 15

葱提げて探鳥会の帰りなる

平 21

夕ざくら電火燵となりにけり

平 23

一句目の「二の腕」、二句目の「剥がすごと」の言葉の幹旋が鋭い。三句目は白いほたる袋か。四句目はおかしみがあり集中数少ない俳味のある句。五、六、七句目は言葉はさり気ないが作者の思いが伝わってくる。八句目は意外性がおもしろく、即物的な把握。九句目柔らかくも深い感覚。これらの人事句は日常の現実生活に即した句と、境涯を越えてしかも作者の全人生を感じさせる句とが混じっている。

風景俳句 その他

厳密な対立でなく、生活俳句以外というくらいの意味である。

今そこにありし日がなし冬桜

平 10

雪解川土いろなして奔りけり

平 11

富士山麓洗ひ上げたる白雨かな

平 14

ふくらんで堰を越えゆく花筏

平 15

海のいろ沖よりかはり鳥帰る

平 22

用なきに港へ来たり年の暮

平 28

空の色花のいろとも暮れにけり

平 23

棚なせる青田を月の渡るなり

平 25

一句目の微かな時の移ろい、二句目、三句目のスケールの

大きさ。横須賀に

お住まいの美代子

さんと海は日常的

に結びついている。

海は人を思索的に

する。七句目はあ

えかなる色、八句

目は幻想的な青が

印象的である。美



あしかび

武井茂子句集

代子さんの句を拝見して感じるのはみな感動の焦点がはつきりしている、潔い、豊かな情感と強い骨格である。俳句の幅の広さを見てのとおりで、それぞれの師の教えは作品となつて結実した。

最後に傾向の違う、興味ある三句を取り上げてみたい。

花屑のつもりて夜みちほの白し

平 23

瀧銚して山中の枯れすすむ

平 22

着膨れて耳まで眠くなりけり

平 22

一句目、現実でありながら夢幻の世界を表現、二句目、枯れを表現するのに瀧音を持ってきた着眼、作者には珍しい聴覚が登場、三句目、俳の世界。これからも期待しています。

ニシン街道^{ましけ}増毛

佐藤

哲

津軽衆守り札抱き渡り漁夫
朝まだき鯨群来れば浜戦場
網たぐる怒号とび交ふ春の海
朧とて畚をかつぐ漁師妻
ばかでかきにしん船あり街中
元陣屋うろこのつきし鯨船
映画ロケ冬場別れのシーン見る
商家の子こぼれにしんが小遣に
地元酒そおらん節の湧き出づる
廃線の停車場は鯨麵どんと

父は北海道立高校の校長を長らく勤め、晩年日本海辺りの増毛校に職を得た。東北地方の学生だった私は春夏の休みに帰省するだけの増毛だったが、母は秘かに将来嫁にと考える女性がいたようであった。目のくりくりした賢そうな女の子だった。アイヌ民族をテーマの卒論制作が忙しくて私の足は自然増毛から遠のいていった。春休み、鯨を焼く煙がたゆとう中、利尻富士は美しい影を見せていた。因みに、「増毛」とは鵜が多いうところというアイヌ語。



祭 来 る

伊 川 玉 子

水琴窟の音さやけしや杜若
夏つばめ手取川の土手の風荒し
松原に喇叭のれんしふ祭来る
東京に一夜の旅や花芭蕉
人形焼買ふ列長き街薄暑
聖五月村人こぞり神事能
松の花入り日ますぐに仁王門
牡丹や出入り自由に寺の門
なかだかな羅漢のおはす木下闇
こきりこを唄ひもてなす夏炉守



美川で吟行した時の事である。海に向かった松林で若者達が喇叭を吹きながら手振り足振り踊ったりしている風景に出くわした。それも学ランを着てである。聞いたところでは地区の祭りの練習をしているという事で、内臓がひっくり返る様な喇叭の音の迫力が忘れられない。残念ながらその祭りの本番には未だお目にかかっていないけれど。祭りと聞くとこの齢になっても心踊るものである。いや、齢を経る毎にその気持ちちは強くなる様だ。

和歌の浦タ立過ぐれば潮招き

和歌山県の北部をゆったりと流れる紀の川。その河口の南側におだやかに開いた入江が、片男浪と呼ばれる景勝地の和歌の浦である。万葉歌人の山部赤人が

若の浦に潮満ちくれば鴻をなみ

葦辺をさして鶴鳴き渡る

と詠んだこの和歌が、和歌の浦を全国に広めた一首という。芭蕉も貞享五年に「行春をわかぬ浦にて追付たり」と詠んでいる。

かつて、良太主宰が関西空港勤務の時、杜宅が和歌山市の北の丘陵地にあり、「風」時代の友人達が訪ねて来ると、吉野や熊野へ案内した。時間の取れない時は近くの和歌の浦、根来寺、粉河寺、安珍・清姫の道成寺などを案内したという。

揚句は、「風」の大先輩である堀古蝶夫妻を和歌の浦に案内したときの句で、驟雨がサーッと来てすぐ止み、干潮の砂浜に数千の「潮招き」が片手を上げて招いていたという。雄のはさみ脚の片方が極端に大きく、求愛するときに上下に振るという「潮招き」の行動。和歌の浦での珍しい光景から生まれた心のやすらぎを得たような作品であった。

(亀田やす子)

鈴屋の鈴のいろいろ松の芯

句の前書に「松阪」とあることから、鈴屋（すずのや）は三重県松阪市にある本居宣長の旧宅を指す。

本居宣長は、江戸時代の国学者・文献学者・医師であり、「古事記」を解説した事や、和歌「敷島の大和心をひと問はば朝日に匂ふ山桜花」の作者として知られている。また、古鈴のコレクターとして、勉学の合間に鈴の音色に親しんだことから、屋号を「鈴屋」と称していた。

このようなことから、宣長のシンボルは「桜と鈴」とされており、桜は一人の人間としての象徴であり、また鈴は学者としての象徴となっている。

揚句は、記念館に遺されている宣長ゆかりの鈴の、そのいろいろな形に見入って、あたかも種々の業績の一つ一つと呼応しているかの如き思いを寄せている。また、松の芯はその古鈴の握りの紐を連想させて微笑ましい。

さて、句の下五の松の芯の「松」であるが、そもそも常に緑を保つ松は、花の時期の短い桜とは鮮やかな対比をなして表裏一体の関係にある。従ってここでの松は、宣長のシンボルである桜を連想させ、鈴とのセットにより宣長のイメージを増幅させていて、句に一層の厚みが加えられた。直接的に「鈴と桜」とせず、松を用いてそれと匂わせる。作者の巧みな仕掛けが窺える。(山本右近)

朝粥に面うるみぬ梅の花

昭和五十七年作。「奈良三句」と前書のあるうちの一句である。

〈伎藝天見し目に野焼はむら立つ〉へ仏見て奈良畦焼の煤かむる〉があるので、早春の奈良秋篠寺を訪ねられたのであろう。

秋篠寺は、細見綾子師が昭和四十五年に「秋篠寺九句」として作品を発表されている。その中に師の代表句の一つ〈女身仏に春剥落のつづきをり〉があり、奈良大和は格別に訪ねたい憧れの地なのである。

それから十二年後、念願の奈良に降り立たれた作者は、まず名物の奈良粥を所望したのであろう。春とはいえ、まだ風は冷たい。眼前のあつあつの茶粥の湯気を満面に身も心も暖かく、これからまみえる伎藝天に心を馳せている。その滴たされた心の高ふりが「うるみぬ」につながる。窓外に目をやれば、梅の花が、まさに朝日に開かんとしている。

師の句の跡をたどり、同じ地に今立っているというように、作者の感動が伝わってくる。

季語「梅の花」が奈良を、伎藝天を、そして作者の思いをしかと受け止めている。

(川口崇子)

若桜ときそひ淡墨桜散る

淡墨桜は、岐阜県本巣市の淡墨公園にあるエドヒガンザクラで、樹齢千五百年以上の古木であり、国の天然記念物に指定されている。

蕾のときは薄いピンク、満開になると白に変わり、散り際には独特の淡い墨色になる。淡墨桜の名は、幹を離れるときの花びらの色に因んでつけられたとのこと。また継体天皇のお手植えという伝承もある。

全国の数ある名木の中でも一、二を争う桜の巨木ではあるが、近年は幹の老化が著しく、多くの支柱により樹木医や地元の人々の手厚い保護を受けつつある。

掲句の淡墨桜の句は、根尾村で詠まれた六句の中の一、句であり句集『阿夫利』の序の中で、沢木欣一先生が激賞され、「数百年の生命を持続させた貫禄と風格を示す」と述べておられる。

いま育ちつつある二世の桜と競い合いながら、大地を驚かみする巨木の姿。長い歳月の重みに耐えながら、古代の玉梓へつながる雅びの花を咲かせ続けてきた淡墨桜。花の乱れも美しく、地へ還りゆく光と影。

それを見つめる小林愛子先生のまなざしがつたわってきます。

(山本みゆき)

諸九尼のこと (二)

―恋に生きた女流俳人―

広瀬俊雄

六、大坂での暮らし―女流俳人として

開放的な大坂での生活は、浮風となみにも住み心地が良かったようだ。各地から俳友が訪ねて来るようになり、歌仙を巻くなどして、浮風の門弟も出来た。なみもこの頃から俳句を詠むようになったと思われる。筑前の杏雨が編んだ『松の中』に、なみの句が載った。

春風や苔をみ初る塚の松 波女

これがなみの初めての句、女流俳人波の誕生である。

こうして年を重ねる内に浮風も、大坂で野坡の一門を束ねていた梅従の片腕となる存在になっていった。



「俳諧百家仙」寛政八年刊

延享三年(1744

6)世話になった風

子が死に、息子の文

下が跡を継いだ。寛

延三年は、様々な疫

病や飢饉、京で大地

震などがあり、これ

を忌みて寛延とい

う年号は宝暦と改元された。十月には野坡の十三回忌、法要と追善の大会がかりな興行が行われ、浮風は執筆という大役を任される。

宝暦四年(1754)、久留米藩で大一揆が起きる。一揆に同意しなかった大庄屋八郎治(なみの弟)の家は、暴徒に打ち壊された。噂が届いてなみは心を痛めたに違いなく、安否を問う手紙を出した。この騒動をきっかけに、なみは両親と心を通わせることができたと思いたい。

十三回忌に続いて、十七回忌追善興行の俳諧百韻が行われた。このときのなみの句、

分別もくらき所に螢うり 雌鳩

これまでは、波女、浪女、なみ女とか記していた号は、このときから雌鳩と改められた。雌鳩はタカ科のミサゴのことで「しよきゆう」と読む。出典は「詩経」にあり、「雌雄の情愛はまことに細やか」にあやかった名である。

宝暦五年九月、浮風は医業を捨て、俳諧で身を立てるべく京都五条の九十九庵(風子の子文下の好意)に移る。

浮風はしばしば中国筋から九州、四国などへの行脚を繰り返した。弟子はだんだんに増えていって、一時衰えていた野

坡門は浮風によつて復活していった。更なる結束を高めるため、浮風は芭蕉と野坡の顕彰碑を建てることを計画した。繰り返した行脚には、資金の調達のためのもあつたと思われる。

宝暦十一年の初夏、浮風に代わつて、なみが吉備への行脚に旅立つた。駆け落ちしてから、初めての遠出であつた。

宝暦十二年（1762）、芭蕉翁の碑と淺生翁（野坡）の碑が建てられた。碑の建立記念句集『朱白集』も出版された。

虫鳴くややがて塩焚く柴の中 諸九
なみは、読みやすいよう、俳名を、雕鳩から諸九へ変えた。

七、浮風の死と宗匠諸九尼の誕生

宝暦十二年五月十七日浮風がこの世を去つた。享年61歳。

つれもありいまはの空にほととぎす 浮風
涙にくれつつ、なみは自らの句も作つた。

ことしの魂祭は、おもひもよらぬ新盟をまふけて、

物いはぬ客を別間や盆の月

百ヶ日の日、なみは突然髪を落とし尼姿になつた。

掃捨てて見れば芥や秋の霜 諸九尼

髪を切るによつて、なみは俳句の宗匠として生きていく覚悟をかためたのかもしれない。浮風の追善句集を作らなければと思ひ立ち、旅に出ることを決心する。

この年の秋、門弟の思之をつれて、京都から宇治川を下り大坂へ、それから瀬戸内海を船で鞆津へ、さらに九州へと行

脚する。故郷に近い直方にも行つたが、実家に立ち寄つたという形跡は無いようだ。京都に戻つたのは明和元年（1764）3月25日であつた。

明和四年（1767）、蝶夢（芭蕉翁絵詞伝は芭蕉伝として有名）の世話で維然の旧庵を買い取り「湖白庵」と称した。自分の庵を持つことで、俳人の訪問もいつそう増えたようだ。翌年、蝶夢が湖白庵の隣に越してきて五升庵と称した。芭蕉の研究に熱心だつた蝶夢が隣に來たことは、諸九尼にとつて大きな力になつた。五升庵を訪れた諸九尼は、蝶夢から「奥の細道」を読ませてもらい、次第に奥の細道へと心を動かされ、明和八年（1771）三月晦日、奥の細道を目指し旅立つことができたのである。諸九尼57歳であつた。

その行脚は、『秋風の記』としてまとめられた。

石山で名残の人々へ

山ふきや名こりは口にいはねとも

と詠み江戸へ向かう、江戸から鹿嶋を経て棚倉街道を北上し念願の松嶋へたどり着く。

鳴くや松の外にはわたり鳥

道中の主要な関所はすべて避けて通つていたので、その行程を見るのは、旅行好きの人にはとても面白いと思う。何句かを掲げてみたい。

風薫る松やいつれを想夫戀（注武隈の松）

いつなくほつれし笠やあきの風（注白河の関）

暮るまで田ことの落穂ひろははや（注 姥捨山の施）

襲むしや落ても草の花のうへ（注 馬より落る時）

はらりはらり萩ふく音やびわのうみ（注 石山に降り着く）

『秋風の記』は、石山に着いた九月四日で終わっている。

旅から旅へと行脚を続ける諸九尼は、奥の細道から帰つてきても席を温める暇もなく旅をしている。

安永二年（1773）、九州へ旅立つ。安永四年三月末、京に戻る。だが三月七日の大火で湖白庵は焼失していた。

焼跡で呆然としながらも、

やけし野の所どころやすみれぐさ

しかたなく、文下の九十九庵に身を寄せた。

安永四年五月再び筑紫へ旅立つ。この頃、故郷にも諸九尼の名声は届いており、甥たちから是非唐島へ寄つて欲しいとの手紙をもらつた。九月末、甥たちからいる故郷へ足を伸ばした。庄屋になつていた甥たちにとって、この叔母は尊敬すべき有名人であつたのだ。駆け落ちしてから32年、長い間負い目を抱えていたなみだつたが、この歓迎に心からの歓びを感じたであろう。庄屋の妻であつたら決して経験の出来なかつた数々の事績、恋に生きた女のもつとも晴れやかな時であつたかもしれない。

安永四年十月に、大恩ある文下が没したという報せを受け取る。手紙が着くまでに四ヶ月もかかつていた。急いで戻ることにして、安永五年（1776）春頃京に戻つた。

ながらへて枯野にかなしきりぎりす（注 一周忌の追善句）

文下が亡くなつたので、九十九庵にいるのも微妙になつてきたし、浮風の十七回忌がすむと、もはや京にいる意味も無くなつてきたような気がした。

世話になつた蝶夢と別れるのが、いちばん心残りであつたろう。五升庵でしみじみ別れを惜しんだ。

わするまじ身にしむ今日の物語

八、筑紫での稗やかな日々

安永七年、京を離れて筑紫に戻る。夫浮風の故郷直方に、甥たちや弟子によつて作られた庵に入り、ここに「湖白庵」の額を掲げた。湖白庵では、この地方の俳人と交わり、また自らも出かけていき、稗やかな日々を過ごした。

こうして、天明元年（1781）九月十日湖白庵にて68歳の生涯を閉じる。戒名は「天利院高誓諸九蘇天」、直方の随泉寺の裏山に、浮風の遺骨とともに葬られた。墓石には夫婦の雅名が彫られている。

長生の恥も思ハぬ花見かな

（参考図書）

『湖白庵諸九尼全集』大内初夫・飯野松子・阿部玉樹共編 湖

白庵諸九尼全集刊行会 昭和35年

『江戸の俳諧師「奥の細道を行く」 諸九尼の生涯 金森敦子著 晶文社 平成10年

『近世女性旅と街道交通』 深井甚三著 桂書房 平成7年

土恋し 岡本敬子

北海道の春は雪間にのぞく土に始まるのであろう。待春の心を一歩突っ込んだ独自の言葉で詠まれている。

凍て風がひねもす道を驟めしゆく

「驟めし」に現場ならではの実感が籠り、視覚の力が心地よく射止められている。春も近い頃の風は、凍る全ての物に命を吹き掛けてゆく。明るい日常にやがて戻る。

竜神の祠ここいら雪の底

深雪に覆われた神聖な景を想像する。記憶を辿りながら雪を除けて行く。雪国の生活を知らない者には宝探しの様で楽しそうにも思えるが、生活者にとっては切実である。

気まぐれで変幻自在雪をんな

怪しげな雪女に会ってみたい。まるでファンタジーの世界のようだ。悲鳴ともつかぬ声、やがて甘えて近づく。要は「気まぐれ」なのだ。作者の変幻自在な詠みに感服。

白鳥や疵負ふものの覚悟の瞳

しなやかで美しい姿にも厳しい眼差しを思う。それは生き抜くための他への威嚇であり存在を知らしめるのである。生物は皆疵を負う宿命を持ち攻撃を負う覚悟がある。

ふるさとの石蹴りあそび土恋し

作品の題の「土恋し」は「春の土」の副季語。土は同時に母恋しに繋がる。仲間と遊んだ土の色や香りは終生忘れられるものではない。春光と共に仲間たちが蘇る。

江の島 卯辰美苗

「江の島」と「江ノ島」の違いを作者の文章により初めて知った。作者はまだまだ若い。色々なことに興味を持って「万象」を先導して下さることを期待したい。

うららかや靴新しく江の島へ

江の島へ行くために靴を買ったのであろうか。浮き浮きした気分が「靴新し」で十分伝わる。季語によって答が解ってしまった。麗かを感じる他の季語も一案に。

江の島へ橋を渡れば恋の猫

餌物が多いせいか江の島では随分猫を見かける。出迎えてくれたのは恋猫の声。猫好きの眼差しに優しさが溢れる。

狛犬の巻き毛ゆるやか風光る

固く巻いてあった毛がなんだかゆるんで見える。ああ春になったのだな、と眼前を感覚で掴んだ句。吹き渡る風に光を感じ、季語が見事に嵌った。

忘れ潮あれこれ覗く磯遊

潮が引いた後、干潟や岩場の窪に残っている潮のことを忘れ潮という。「あれこれ」が面白い。潮溜まりには蟹や小魚が戯れている。たまには童心に戻り遊ぶことも大事。

春爛漫弁財天の玉の肌

日本三大弁財天の一つである江の島の弁財天は白い。それを「玉の肌」と讃えた気持ちの良い句。季語の力を感じて捉えた若さを、全体の句の流れから感じた。

同人作品評（六月号）

大 木 茂

先人の津波いしぶみ辛夷咲く 竹澤竹里

平成二十三年三月の東日本大震災に伴う津波は、現実のものと思えない被害をもたらした。後日の報道では、先人が後世に伝える津波の教訓の碑があちこちに発見されている。遠い昔からの伝承は、人々の記憶が薄れるにつれて失われてしまふ。しかし、被害や逃げ惑う人々の様が刻まれた碑は、風化することはあつても存在し続ける。この碑には津波の戒めも刻まれているのだろう。傍らに咲く辛夷の取り合わせが効いている。

田一枚埋めつくせり仏の座 内田郁代

早春の田園には一日ごとに日の光の強さが感じられるようになり、大地に萌える草々にも明るさを覚える。冬の七草にも数えられる仏の座は早春の花の象徴である。一面の田を埋め尽くすこの花は、冬の間外に出ることの少ない人々を和ませる。同じ仏の座でも、田んぼの土の成分や光線の加減で花や葉の色が微妙に異なる。何気なく見過ごしている風景をこのように詠む人に出会ふと、己の普段の俳句への向き合い方のいい加減さを痛感する。

水温む泥鰌のたつる泥煙 須賀允子

泥鰌は日本全国の水田や川などに生息する身近な生き物で

申告日毎年黄砂飛ぶ頃に 奥山テル子
確定申告は、二月中旬から三月中旬に行われる前年の収入支出にかかる税の申告である。丁度この頃は、中国大陸に舞い上がった黄砂が強い偏西風によって日本列島を覆うので、申告と黄砂は記憶が繋がる。また、杉花粉が飛び始め、申告に行く人の多くはマスクを掛けている。春先の人事と天然現象の繋がりを一物仕立に詠み、共感を呼ぶ句である。

百済寺の塔に向かひて土筆摘む 山口素基

百済寺は、奈良県広陵町にある高野山真言宗の寺院。寺の創建、沿革は詳らかではなく、木立の中に三重塔と本堂のみが残されている。三重塔は国の重要文化財に指定され、周囲の住宅街を囲む田園地帯と調和した風景をなしている。塔のほかに目立つた建造物がないだけに、塔の存在が引き立つ。仲春の大地の土筆と歴史ある塔を囲む風景の遠近の対比に、句の広がりを感じる。

ある。雑食のため蚯蚓、藻などの餌を与えれば水槽に飼える。水田や川は秋から冬にかけて水が枯れるが、泥鰌は泥の中に潜って越冬する。水が温む頃には餌になる水中の生物も動き出し、泥鰌も動き出す。作者は泥鰌の生態を良く観察しており、動き出した泥鰌が時折水底の柔らかな泥煙を立てる様を、写生の目を利かせて詠んでいる。

春耕やひと鍬ごとに石拾ふ 小林珠江

春の気配が身近に感じられるようになると、春蒔き野菜や種芋を植える土作りの準備が始まる。山縁の田畑の耕しは小石との戦いである。鍬の畝立てを行えば、火花の散ることがあり、見つけ次第畦や山に放り投げる。しかし、ひとたび大きな雨が降ると土が流され、元の木阿弥になつてしまう。山畑の耕作は難儀の連続である。作者の実体験の句であろう。〈山国の小石捨てく耕せり 沢木欣一〉の句と通じるところがある。

川底にさざ波の影水温む 大橋雅子

早春の清流の景をすがしく詠んでいる。さざ波の波紋が水底に日光を通していざよう様は見えていて飽きない。水温む頃は水中の微生物の繁殖がほとんどなく透明である。太陽の光に力を感じるようになると日を追うごとに波紋の色も濃くなってくる。心待ちにしている春の訪れを「水温む」とい

う感覚で捉えている。

アメ横を一駅歩く春隣 曾根 満

上野駅と御徒町駅の間のアメ横街は、柵以外の物は何でもありの店が密集しており、最近では流行のB級グルメの店舗も増えている。人混みの中を店の客引きの声に氣をとられながら歩くのは結構楽しい。大寒がまもなく終わろうとしているアメ横街を逍遙しているうちに、一駅間を歩いてしまったのである。アメ横の風情に釣られて歩いた作者の心情がよく出ている。

鍬直す鍛冶の火花や浅き春 塩井志津

私の町にも、六十年代前までは鍛冶屋が一軒あった。下校時に鍛冶屋に寄り、鞆の風の起こすコークスの中から、親方が真っ赤に灼けた鉄の棒を取り出し、玄能などで叩き出すのを興味深く見ていたものだ。近年はホームセンターなどに安物が出回っているが、鍛冶屋の鍬に比べると使い勝手が格段に落ちる。秋の収穫後から春先に掛けて鍛冶屋は忙しい。鍬のすり減った刃先を打ち直して使う、農具に寄せる作者の優しさが伝わる。

花の額

大山春江 (船橋)



水底に稚魚の群るるや夏来たる
水門の赤信号を夏燕
引潮に置いてきぼりの小蟹かな
水際より寸の鰻の子はや飛びぬ
富士壺のおほふ捨て舟梅雨深し
貝殻の目立つ境内松落葉
境内の崩れし土俵蟻のぼる
保線夫の合羽に触るる額の花

谷 保 天 神

赤 松 郁 代 (東京)



天神へ辿るはけ道囀れり
そよ風や軍鶏矮鶏あそぶ梅の下
神鶏の芽吹き森に啼き交はす
朝日差す崖に鶯昂りて
春落葉分け土を浴ぶ長尾鶏
葱坊主野をゆく水の底透けり
水際に利き足据ゑて芹を摘む
芝に佇ち芝に座りて暖かし

万象ノオト

テーマ

「旅」



孫を旅に連れ出して

芳賀 堉 テル

北海道から沖縄まで、私達夫婦は孫と一緒に色々な所に旅行しました。特に思い出に残っているのが、一番初めに連れて行った「利尻礼文島の旅」です。悪天候の中で乗った船が大揺れで、あまりの怖さに孫が大泣き、大騒ぎ。船の中で大迷惑をかけました。さすがの私も気分が悪くなり、孫の面倒をみるどころではありません。大揺れの中、夫が孫をおんぶして、一時間半じつと耐えてくれました。この時ばかりは、連れて来た事を少々後悔しました。

そんな孫も高校生になり、今では海外でホームステイを経験し、立派に成長

しました。そして、私達夫婦の今の旅は、年齢と共に「安近短」となり、身近な再発見旅を楽しんでいます。

旅と俳句

横浜 富田 要

旅で思うのは西行に憧れた芭蕉を始めとし支考から井月などに至る放浪の俳人である。旅を好んだのは目新しい事物、非日常の体験が感動を呼び句心を興す事も一因ではなかったか。

自分の経験からも海外旅行から日帰りの吟行まで多くの句を旅行吟として詠んで来た。但し以前万象賞応募でも痛感した事だが、旅行吟は現地を知らない読者には通じ難い欠点がある。

自分は現在転倒に因る怪我が原因で脚が不自由となり、以前より旅に出る事が少なくなつたが、代りに狭庭を訪れる季節からの連想や他結社超結社句会への参加で得る刺激を力としている。

結局色々理屈付けをしても自分の句作は「おくのほそ道」の冒頭の「月日は百代の過客にして行交ふ年も又旅人

也」の通り時間を行程とした旅の中の句であると芭蕉に戻る事に気がついた。

お遍路の旅

金沢 石川純子

色々の旅の中でも、夫と巡つたお遍路が印象に残る。一番札所で白装束、杖、笠で形を整え気持ちを引き締める。風に押され、杖の鈴に励まされつつ無言で歩いた。始まりは遍路の作法もぎごちないが、札所を巡っている内に落ち着き、心に変化が出て来たのは貴重な体験だった。

四国の海の丸い水平線を望んだ時、地球は瑠璃色の玉と、えも言われぬ感動に浸った。自然と融け合い自分も自然の一部と感じられるお遍路は旅の醍醐味と言えようか。また、札所でずれ違ふ旅人の、一期一会ならこそ何気ない言葉が尊く今も心の深い所に納まっている。風が吹き抜ける清々しい境地を忘れぬ様、杖は床の間の隅に立てかけてあり、杖を手にする時鈴の音にお四国さんが広がる心地がする。

ネパールを想う

船橋 山口秀吉

昔から山を留った者として、エベレストは憧れの山である。その山を飛行機から見られるとのパンフレットに惹かれ、ネパールに出かけた。

旅は素晴らしい。カトマンズ観光、トレッキング、エベレストを見る遊覧飛行。念願のエベレストは操縦席から見ることができた。日本とは山群の規模が違う。四、五千坪では名前さえ無い山の高さ、多さ。そして土着的なチベット仏教、ヒンズー教。

そのネパールに、二〇一五年大地震が起きた。当時の報道では、生き神様の居る王宮近くは、ほとんど壊滅状態であった。最近の報道でも余り回復していないようであるが、回復したあの風景を再び見たいと願っている。

なんじゃもんじゃはなに

津 瀬野喜代子

「対馬へ行ってみない？」と、娘に誘

われたのはまだ春浅い頃。「五月だと、なんじゃもんじゃが満開だって」。列島の最西端、対馬。ふいに好奇心が湧いた。一年前の背骨圧迫骨折で、速くは歩けないが頑張ろうと、いつもの息け癖がどこかへいつてしまった。

中部国際空港から博多空港へ一時間十五分、対馬（別名やまねこ）空港まで三十分。車で西山寺ユースホテルへ。寺史に拠れば、江戸時代に僧衆は朝鮮通信使の接待や書契の清書などをした。翌日は島を北上し、藩主宗家の城下町へ。防人の住居跡は其処という脇の道を車で走る。微用された防人の決意と望郷の歌を思い胸が塞がる。野生生物保護センターでツシマヤマネコに会い、無心な仕草を飽かず見る。

鰐浦の入江はなんじゃもんじゃが群生し、初夏の国境に雪が積もっていた。

K子との日々

東京 山森明子

高校二年生の春、親友のK子が、ゴールデンウィークに平泉中尊寺へ行

こうと言ってきた。まずは親の許可を取るべく、いつにも増して家の手伝いをやり、言われる前に机に向かい、外堀を埋めた。

パック旅行など普及しておらず、今のようにネットで簡単に調べられる訳もなく、全て自分達で計画を立て、手配しなければならぬ。放課後は、連日K子の家で、時刻表を片手に、あれこれと脱線しつつも案を練り、宿を予約して、ようやく出発の日を迎えた。

中尊寺、厳美溪、浄土ヶ浜、遊覧船からの海猫の餌やり、龍泉洞……と、思い出は尽きないが、出発前にK子の家で過ごした日々もまた、半世紀も前の大切な旅の思い出である。

「万象ノオト」投稿募集

▽12月号「ケーキ」（8月末日締切）

▽1月号「三日坊主」（9月末日締切）

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先が変わりました。

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西

2-18-1-107 久留島規子

自然を歩く 23

篠原 徹

【句の生まれる場】

日暮里からでる京成電車が、隅田川・荒川を過ぎ中川も渡り江戸川を通過すると国府台駅がある。この駅から北へ向かう道は少し上り坂になっていて弘法寺の鬱蒼とした森にぶつかる。ここは関東平野に残った森らしく巨大なクスノキやケヤキあるいはエノキが聳えている。境内の上はぼつかり空にいて丸い蒼穹が見え、境内に「まさなる空よりしだれざくらかな 富安風生」の句碑と桜がある。句が生まれる場にはなにか必然性があるのではないか。台地から西を見下ろす光景は広重が江戸百景の「鴻の台とね川風景」として描写している。現在市川市になっているこの地域が数十年前まで台地上の果樹栽培の盛んの農村であったことなど信じられない。しかし、水原秋桜子の「梨咲くと葛飾の野はとのぐもり」の句碑も弘法寺にある。この句を生んだ場は江戸川の左岸台地上の農村地帯であったのであろうが今は面影もない。関西の農村とは異なる如何にも関東の農村らしい風景ではなかったのではないか。

公益社団法人俳人協会

特集

戦禍・天災を超えて

改めて問う、俳句の力
——社会を激変させる巨大な災厄を前に、俳句を詠むということの意義を考える

巻頭作品10句

雨宮きぬよ・小川軽舟・恩田侑布子・辻田克巳
鳥居美智子・二ノ宮一雄・星野恒彦
村上喜代子

俳壇

8月号

7月14日発売
定価800円(税込)

巻頭エッセイ
山口梅太郎

八木健選 滑稽俳壇

新連載 四季巡詠33句 友岡子郷・中西夕紀

まんが・天折俳人伝 鎌田邦夫 長谷部 徹

新連載 ゆうゆう書簡……正木ゆう子×小島ゆかり
日本の樹木12選……広渡敬雄

連載 俳句論のゆくえ……坂口昌弘
子規・仰臥六尺……復本一郎
人生に効く、俳句……小島 健

俳壇時評……権未知子／俳壇月評……日下野由季

俳句と随想12か月 塩野谷 仁・和田順子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430



伊豆

伊豆を愛した井上靖

井上靖は歴史小説（歴史を取材したもの）、自伝的小説、現代を舞台とした小説など多くの作品を残している。昭和二十五年「闘牛」で芥川賞を受賞すると、『天平の甕』（昭和三十三年）で芸術選奨文部大臣賞、『氷壁』（昭和三十四年）で日本芸術院賞、『敦煌』や『楼蘭』などで第一回の毎日芸術賞と、数多くの文学賞を受賞し、昭和五十一年、六十九歳で文化勲章を受章した。生涯を通じて数多くの作品を残してきたが、とりわけ歴史作品等は各国語に翻訳され、たびたびノーベル文学賞の候補とされた。いわば世界的な作家と言っても過言ではない。そんな靖は「少年時代を過ごした伊豆で私という人間の根底になるものはすべて作られたと考えていいようである」（『私の自己形成史』）と記しており、彼の作家的なルーツを探るうえで伊豆での生活は見逃すことができない。

明治四十年、靖は軍医である父の赴任先の旭川で生まれた。しかし、井上家は伊豆で代々続く医家であり、靖の両親はともに湯ヶ島の出身である。靖が一歳の頃、父が韓国に赴任

することになり、そのときに靖は母とともに湯ヶ島に戻っているが、数え年四歳で血の繋がらない戸籍上の祖母かのに預けられた。かのは靖を手放そうとせず、また靖もかのに懐いていたため、かのが亡くなる小学校六年生までのあいだ、小さな土蔵の中で靖は祖母と二人で暮らした。

やがて父の赴任地が浜松になると、靖は浜松中学に入学し、家族と暮らすようになる。ところが、父が今度は台湾の病院に転勤することになり、それを機に靖は中学二年の時に沼津中学へと転校する。三島の伯母の家に下宿し、毎日五^里の道のりを徒歩で通学したという。この沼津中学時代に、文学好きな上級生との交流の中で、靖は文学に目覚めている。

靖の代表作のなかでも『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』は自伝三部作といわれており、このうち『しろばんば』は湯ヶ島が、『夏草冬濤』は沼津が舞台になっている。これらの作品の主人公は、旧家の息子としての誇りや、家族の中での疎外感を背負っている点が特徴だ。祖母は自分の不安定な立場を強固にするため靖を手懐け、靖は祖母を味方にすることで祖母の愛情を受け取る同盟関係であったと記している。沼津の都会らしい生活に目を見張り、生き生きとした街の少年たちとの遊びの中で煙草を覚え成績が下がったりもしたが、沼津市街で狩野川を見るたびに、靖は湯ヶ島に思いを馳せていた。このことから、靖のこよなく愛していた「故郷」とは、生地ではなく、祖母と暮らした伊豆であることが窺い知れる。

（写真は愛鷹山の麓にある井上靖文学館）

（加山ひさ子）

俳書探訪

山本とく江

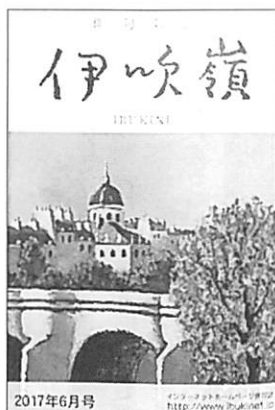
「伊吹嶺」平成二十九年六月号 主宰栗田やすし。

平成十年一月、栗田やすしが名古屋で創刊。師系沢木欣一即物具象、写生を基本に風土に根差した俳句をめざす。

見開きは六月の句、沢木欣一・細見綾子両師の句をそれぞれ

も添えられ、揺るがぬ指針であろう。

伊吹山房雑誌 顧みれば四十五年は主宰の現在の心境、「伊吹嶺」の更なる発展を夢見て精進したい。



れ同人が鑑賞、写真も添えられ、揺るがぬ指針であろう。

と述べており感銘をうける。次に主宰の第二句碑除幕式・祝賀会風景のグラビアが晴れやかに掲載されている。

主宰詠 木瓜の花（八句）より

白牡丹しべをあらはにして崩る 栗田やすし

生来の怠け心や木瓜の花

梅は実に籠大仏はほほゑめる

副主宰詠 夕桜（八句）より

哲学の道の向かうを初蝶来 河原地英武

ため息を咎められたり夕桜

秀峰集 諸家自選より

春光へ祈禱所の窓開け放つ 近藤文子

春の川信長といふ屋形船 中川幸子

初花にやさしき雨や句碑除幕 栗田せつ子

遠峰集 栗田やすし選より

花文字の美しき聖書や鳥雲に 森垣一成

足で足洗ふ園児やチューリップ 中野一灯

栗田やすし主宰第二句碑除幕式の記 下里美恵子

二百人が参集し、十二人により除幕された句碑へ寒月が鶴川の底の石照らすこの「寒月句碑」は「ふるさと句碑」であり、主宰を中心として多くの人々の心をつなぐ「縁の句碑」であるとの思いを強くしたと結んでいる。参加した方々の特集ページが続く。遅れ馳せながらお祝いを申し上げる。

連載は、加藤孝男氏の二十世紀の百人一首、福島泰樹「続中也断唱」と下里美恵子氏の二十世紀の百人一句（石橋辰之助）、それぞれ斬新なアイデアで興味深い作品である。

雪嶺集 井沢陽子選

十字架の鳥は椿の小振りなる 高島由也子

その他エッセイやいぶきネットの活用、各集毎の俳句鑑賞など切磋琢磨している様に、僚誌として大いに刺激を受けた。

二十周年目前の「伊吹嶺」益々の発展を祈念してやまない。

（筆者住所 〒277-0005 柏市柏1・7・1・2006）

春風と春風はるかぜ しゅんぷう

燕村「春風馬堤曲」よりの試論

福田 雅子

「燕村処々」の拙文は五回目になるが、まだ毛馬の堤の周辺を追遡している。勿論、燕村の付した題名は、「春風馬堤曲」である。繰り返しになるが、内容は奉公先から暇を貰って故郷に帰る若い娘に仮託した発句、短詩、漢詩などの混交体の十八首である。萩原朔太郎は、著書「郷愁の詩人―与謝蕪村」の中で、蕪村はこれを「俳体詩」と名づけているが、まさしくこれらは明治の新体詩の先駆である」と述べている。

題して、「春風馬堤曲」

前稿で、その体裁は掌編小説のようであり、劇の要素もあると述べた。起承転結を備え、周到に気を配った構想である。

最初の二首は発句体である。

やぶ入や浪花を出て長柄川

春風や堤長うして家遠し

二句目の初五は、誰しも「春風や」と読むだろう。

春風と春風、字面は同じで、どちらでも構わないではないかと思う人もいるだろう。しかしちがうのである。参考として一海氏の『白の詩人―蕪村新論』（ふらんす堂刊）を挙げよう。引用文が少し長くなるが御容赦願いたい。

―「春風馬堤曲」の題に合わせて、少なくとも詩中においてははこの句もシュンプウと読むべきだとの意見もある。

しかしこの句、ほかはすべて訓読みばかり。音読するものは何もない。詩の題はシュンプウ、中の句はハルカゼ、そのちがいがおもしろいのである。―

付け加えて、春の風と春風も感覚がちがうと言っている。

一海氏は、両者の例として、次の句を挙げる。

春風に阿闍梨の笠のにはひ哉 蕪村後集

野ばかまの法師が旅や春の風 蕪村句集

「阿闍梨」は高德の僧。さすがに笠にまでたきしめた香が奥床しく匂う。ここに使われている「春風」はあた、かくて、

優雅な趣きである。

「野ばかま」の句。野袴は、江戸時代の武士の旅行用の袴。

それを勝手もちがう僧侶が身につけて旅をしている。「春の風」は、武骨な野袴を吹き返す即物的な風となっている。

イ、春風をつまかへしたり春曙抄 蕪村後集

春曙抄は、北村季吟による「枕草子」の注釈書。延宝二年（1694）

成立。つまは着物の裾だが、本の頁の意に使う。

ロ、片町にささら染むるや春の風 蕪村後集

イの「春風」の句。古典的で優雅である。

ロの「春の風」の句。実生活的。

蕪村はほとんど無意識であろうが、的確に使い分けている

と一海氏は解説している。無意識の語の選別、流石である。

高浜虚子の次なる二句、どのように鑑賞すべきか――。

春風や関志いだきて丘に立つ 虚子

関志尚存して春の風を見る 虚子

川村 みよき(新潟)



巻頭作家(七月号)プロフィール

まいました。これは私の大きな勘違いでした。それまで顔をあわせることはなかった川村みよきさんの字は、あまりにも達筆で男性的だったからです。

当日、初めて顔を見ましたら若い美人で、これには私も顔が青くなりました。さっそく宿と交渉をしてなんとか女性軍の部屋に入ることができて、ほっとしましたが、それから私の頭の中から川村みよきさんの顔が消えることはありません。

新潟県小千谷市に志城柏先生の主宰する「花守」という小さな俳句の結社がありました。私も川村みよきさんもその会員でした。志城柏先生は文学者であり、「目崎徳衛」として西行の研究の第一人者としても知られていました。そして「風」の名誉同人でした。

私が川村みよきさんを知ったのは、小千谷の「花守」で吟行句会があり、新潟市が吟行地として決まった時です。

私は新潟の会員として幹事をしていましたので、宿泊先の部屋の割当を担当することになりました。その折に川村みよきさんを勝手に男性だと思い込んでしまい男性軍の部屋に割り当ててし

「万象」新潟県支部には三つの句会があります。「河交句会」「新潟句会」は佐藤雄二さんが指導されております。

もう一つの「芽柳句会」は私が指導しており、川村みよきさんは「芽柳句会」の会員です。このたびの巻頭の知らせに句会一同大歓声でした。何事にも前向きな川村みよきさんは俳句にも熱心で、これまで万象作品の佳句にも多く取り上げられました。

大坪景章先生 万象作品佳句より

瘦身の燠らすパイプ星涼し
挨拶の秋の簾をたくしあげ
枇杷の花寡黙な人を吊へり
曲舞の鼓合はせや秋時雨
飛高隆夫先生 万象作品佳句より
子規居士の倍を生きをり月見豆
七五三恐竜図鑑抱へをり
蒲団干す例句あまたや雪籠
山茶花の下より箒初めかな
切り岸の鳥啼き交す日永かな
雷鳴の退き潮騒のかへりけり
萩の濃き籬やいよ路地細し
箴の音聴きつつ山の眠りけり
稲株に未だ雪おかぬ年の空

巻頭の句は

春の陽や日に日に疾き水の音
春の日や言語リハビリパビポ
貼り交ぜの広重写楽籬の間
母恋ひの句を遺せしと梅三分
巻頭に甘えることなく、これからますます磨きをかけて「万象」のため頑張ってください。
(佐藤三男)

万象作品

飛
高
隆
夫
選



チューリップ風の向かうは海の青
時どきは戻ることあり蜷の道
東京 中村 弘

空に色放ち揺るるや紫木蓮
薄明に仄仄白き桜かな

薬師寺の跡たんぽぽの野となりて
佐野 芝宮留美子

花筏潮入池に細き帯

麦の穂の風しろがねに走りけり

時の鐘ゆつくり聞こゆ浅き夏

一村を満つ若夏の日のにほひ
那覇 中本 清

バックナー中将の碑を哭く雪加

壕を出て壕に黙礼百合一輪

黙禱の時を鎮めて合歡の花

海人の潮したたらせ若布干す
敦賀 龜田勝子

隠し田の田螺夕日にうごめけり

海神へ瑠璃の灯ともし螢鳥賊

獵師宿背に百幹の竹の秋

月はやし桜葉降る九段坂
市川 奥澤よし江

雨音の奥の静けさ白牡丹

夏立ちぬ洗ひぎらしの綿のシャツ

顔見知りらしき風情の蜥蜴かな

酒蒸しの浅蜷は酒に飲まれけり
福岡 宮田千恵子

風の音水の音まで春深し

涅槃仏指ふくよかや百千鳥

さへづりを柩の姉と聴きにけり
ひつそりと医院閑ぢけり弥生尽

新潟

川村みよき

囀や褪せし読本唱歌集

囀を啼き散らしたる大鴉

雉つややか威風辺りを払ひけり

天よりの追伸の如春の雪

札幌

勝木享子

歌ふやう花のひとつひら病室へ

雨だれのためらひがちに春の虹

水芭蕉還るところは生れし泥

人寄せに片栗群れて過疎の村

金沢

河野尚子

始発駅土新しき燕の巢

藤の花眼下に光る日本海

海一枚棚田千枚春夕焼

万緑を押して泣く声誕生す

日野

喜多尾明子

こでまりや眠る嬰兒手を握り

ややありて墓体を変へご退場

風の来て藤に重さの生まれけり

みずならの白き切り口菜種梅雨

札幌

北浦詩子

ひめ皮は握り寿司にて初筍

花に添ひ葉も燃ゆ蝦夷の山桜

落葉松の百ミクロンの芽吹かな

佐々木茂

ビストロや紅花栃の並木路

アスパラガス炒め独りの昼餉かな

ドローンより高き空舞ふあげひばり

春うづくプレパライトの微生物

さわらびを握手するかに稚児摘めり

青鷺の婚姻色へ立ち尽くす

クラーク像指差す先に羊の仔

桜咲く荒野拓きし馬の碑に

虫捕ふ嘴に力や巢立鳥

法螺貝の銜相うつ谷若葉

風よみてほぐす花びら北辛夷

青鷺の脚まつすぐに飛びゆける

水芭蕉の根もとついばむ番鴨

かはせみの飛び立つ時にきらめけり

朽ちゆける破船卵の花腐しかな

洗ひ髪子から女人の匂ひかな

母の日や母と暮らせぬこと詫ぶる

奥蝦夷に木肌の粗き山桜

啄木の碑の丘巡る若葉風

ふらここの足の間より遠嶺かな

永き日の猫のあくびをもらひけり

長くひく牛の涎や山笑ふ

札幌

島崎 洋

園田 鶴子

高山 誓英

竹重 富子

長田 秀行

中鉢 弘一

八代 洋子

母の年越えて落煮の味かげん
供養雛火の粉となりて雲に入る

新庄

曾野部礼子

山腹の崩るる音の雪笹

里山の空に混み合ふ芽吹きかな

山寺の雨のきらきらと小米花

東根

門脇好子

城跡の濠の細波菖蒲の芽

大手門くぐり抜けたり花吹雪

廃業の湯屋の煙突二月尽

新潟

佐藤シズエ

菖蒲湯や銭湯のなき町となり

竹落葉車夫の掛け声京訛

着陸の飛行機の灯の朧かな

中塚滋子

廃線路はわが遊歩道草朧

夕映えのいよ色濃き白木蓮

色刷りの花のかがやく種袋

燕

渡辺志ま

先代も使ひし柵や種物屋

通学の新銀輪や風光る

試飲所の白壁に映ゆ柿若葉

宇都宮

安久都 登

花びらの帯を踏みゆく遊歩道

山吹や黄色い帽子列つづく

釣人へ何処からとなく花の塵

神の杉梢より降る瑠璃の声

囀に皆目を瞑るベンチかな

福田 弘

ツピツピと納屋のまはりを初つばめ
翁草肩よせ合ひて鉢の中

芳賀

稲川清子

尾がからみ右へ左へ鯉織

つばめの子卵のかけらおとしけり

大畑ハマ子

春雷の去りて夕空明るくす

初夏の氣分に浸る朝の風

初夏の風簾揺らして厨まで

クローバの四葉見せ合ふ親子かな

見目トキ子

緑蔭に移り葉の話など

若草を食べさせ朝の乳搾る

小林元子

三輪車届きてはしやく子供の日

艶やかに影もあでやか紅牡丹

藍染屋の香りほのかや白牡丹

益子

光岡れい子

青空へ駆け上がるかに山の藤

朝明けや光の波の穂麦畑

薦若葉空家の壁を這ひ上る

鹿沼

渡辺利子

杉木立淡く二重に春の虹

夕やけの空いつぱいの水田かな

春空へネモフィラの青溶けこめり

栃木

飯塚キミ

補植する植田夕星一つかな

遊水地角組む蘆に力あり

葭切の鳴くばかりなり遊水地

上岡佳子

ランドセルの二人しやがむや蟻の穴
餌台に巢葉銜へて雀かな
花どきの雨に煙るや東照宮

佐野

飯塚満里子

暮れなづむ男体山のはだら雪
紫木蓮猪の毘ある山の墓
アルパカの遠き目差し若葉風

売野 緑

梅と桜並んで咲ける平家村
鎌糸すつと引きたる花衣
万緑や遠くて近き昭和の日

塩島トシ子

草刈りの鎌とぐ夕べ初蛙
近づけば葉裏に隠る天道虫
空広き薬師寺跡や揚雲雀

島田和枝

耕せば鵲鴿寄り来歟の先
白き花多き山々夏に入る
ガス燈のペリーの小道風薫る

関口かつ子

春雨にけぶる黒船下田港
海鼠壁映る川辺や糸柳
茶毘を待つ咲き初むさくら窓に見て

店網洋子

色深き蘆の若葉の遊水地
潦おほふ落花や鶉の声
走り根にまたも蹟く花の昼

寺内まち

白藤を待たずに友の逝きにけり

老桜の虚に蛙の目の光る
しだれ桜類につめたくふれにけり

佐野

永澤千代子

ぼけ封じの寺に大きな木瓜の花
城跡やぼんぼり揺れて花の散る
花散るやゆつくり廻す摩尼車

仲山さよ子

薬師寺跡青梅の香に触れてみる
筍の穂先の滴光りたり
袋角の鹿一心に我みつむ

松田富夫

水浴びて小さき身震ひ雀の子
若鮎の堰越ゆる腹白きかな
山桜ふぶくや薬師寺伽藍あと

茂木弘子

草叢のすみれに朝の日矢差せり
夕されの桜蕊降る石舞台
花の夜もろ手大きく深呼吸吸

義本美智江

急逝の友の墓参や養花天
花吹雪梢の鶉の宙返る
葉桜や静けさ戻る小田原城

川越

岡野輝子

山藤や杉の製材匂ひけり
茄子苗を提げて乗り込む山手線
夕牡丹庫裡よりカレー匂ひ来る

栗田文代

新樹光浴びて木道渡りけり
緑さすお宮参りの母と児に

大利根の雪解水のひた走る 川越 黒木敬子

残雪の天神平夕映ゆる

戸袋の巢へ餌運ぶ春の鳥

停車駅開くドアより雉子の声

藤まつり地べたが舞台フラダンス

新緑に巫女舞ふ鈴の響きけり

鎮まれる於岩稲荷や桐の花

海の色してネモフィラの丘風光る

街中に水番所跡濃山吹

湧くやうに蝶の飛び交ふキャベツ畑

鯉幟川に映りて泳ぎけり

茶柱の立ちし湯吞や柏餅

聖五月夕日に浮かぶコロッセオ 坂戸

鶯来ては一本桜散らしけり

甘茶かけ花魁おねり始まれり

八ヶ岳すつきりと晴れ夏つばめ 所沢

牧場にパン焼く匂ひ姫女苑

げんげ野に忘れられたる三輪車

小賀玉や溥傑仮寓のつつましく 千葉

青葛の模様のやうな溥傑の書

根上りの黒松林若葉風

雪溪を背負ひ鳥海山聳ゆ

鈴木アキエ

津金房子

山下とし子

守山勝江

南雲秀子

清水美知子

松浦陵保

白虎隊悼む会津の八重桜

新緑や笹の響き若々し

藤棚のこちよき風石畳 千葉

炎天寺一茶の池に蝌蚪生れ

花馬酔木險重たき一茶像

丈揃ふ植田に風の渡り来し 酒々井

晚鶯の鳴き継ぐ朝の宵雨かな

昼の鐘鳴り渡る町初燕 佐倉

チューリップ今日クレヨンがよく匂ふ

門口へ桜葉降る野辺おくり

開拓田守る社の若みどり

これがそれ旨しと咽する麦こがし

猪が沼渡り来るとか露の雨

抜歯後の日差し眩しき夏立ちぬ

チューリップせつせと作る砂団子

鳥どちの声なき干潟藻草生ふ

揚雲雀沼に広ぐる干拓田

野仏に筒飯を供へけり 四街道

畑中に三百年の桜散る

多羅葉の花房芽吹く社かな

改築の後にも燕をさまりぬ 船橋

青芝の生き生きしたる朝日かな

柳澤道子

小林あけみ

有泉正夫

竹内実

横川良子

塗木翠雲

入河大

雨雲の重く垂るるや藤の花
走り根に躓き歩む花の下

船橋

内田節子

弥生来ぬ母の忌いつも雨に暮れ
幹に咲く桜一輪色の濃き

片桐帆一

葦の角風車の動く風出づる
松風や桜葉降る母の墓

槐島 修

わき上がる若葉の中の灯明台
校門の校名残り桜咲く

近藤澄子

こでまりの花の重さが風よべり
千枚田果てに一本山桜

宮本加津代

しばらくは櫻吹雪の中にをり
翡翠の川面をとべる迅さかな

山口秀吉

雉子不意に道に現れ鳴きにけり
雨脚の明るく見えて桐の花

吉原千恵

半分はまだ濡れ色の燕の巢
試飲してやはり新茶を買ふことに

山口秀吉

鯉下げ波を背に立つ男の子かな

柏

鹿毛満子

たつぷりと腹ですはりし孕み鹿
緋牡丹の憂ひの数の重なりぬ

松戸

菊岡緋路

どろんこの手足の子等や緑立つ
老鶯やぶだうの幹の床柱

湧水やみな下向きし桐の花

夏燕水攻め耐へし忍の城

野田成夫

卯浪かな野島燈台岩だたみ
多羅葉へふみ書く指に青葉風

花筏夕日の中に小鶯をり

渡部洋子

町角の小さな宴夕桜

芽柳のひとすちごとに風のま

東京

雨宮ミチヨ

花の宴小さき筵にひしめきて

生垣に子雀一羽細き足

母を訪ふ慣れし近道白木蓮

新井世紫

参道の空は小さし杜青葉

かけきれぬ絵馬盛り上り樟若葉

夫の歩に合はせとどまる著莪の花

安藤美酒々

夏初め越後上布の白眩し

こひのぼり疲れ知らずの泳ぎぶり

落成の松の緑や能舞台
さくら咲き老舗の暖簾さくら色

石井登女

柏餅供ふるや父に思ふこと
春の雷眠気ざましのひびきかな

甲高き尾長の声や柿若葉

東京

石山風童

蝶ひとつまぎれこんだる花吹雪

飛花類に半跏思惟仏笑むごとし

冴え返る大仏殿の太柱

小池宗彦

大川のさざ波光り桜餅

立ちしまま眠る駱駝に繻れり

眠る兎にまだらの日差し楠若葉

下嶽孝一

愛想よき酒屋のおかみ燕来る

花桐の雨むらさきに船の出る

登廊の長きを忘る牡丹寺

杉浦一子

塗りたての木戸の匂ひや薄暑光

暮れてなほ明るさ残る麦の秋

二つ目の出囃子軽し窓若葉

田崎京子

春深し迎賓館の花鳥の間

うす紅の大藤ことに香りけり

区役所の池に遊ぶや蝌蚪の群

鶴田智美

強風や渦まき踊る八重桜

ざる盛りのたらの芽朝の城下町

土塊と手につかみしが墓

徳竹良子

少年の何かをめざし松の芯

梁太き山の駅舎や夏燕
雨のあと庭の草取始めけり

東京

中澤桃子

三社祭印半纏小若かな

出勤のスーツ身に付き花は葉に

春の日に細波光る五十鈴川

中ノあさ子

上野山賑はひ去りて四月尽

紅白のつつじ満開根津の宮

立読みを睨まれてゐる遅日かな

長谷川信也

白き腹はり戸に直と青蛙

砲身を立夏の空へ秋帆船

職辞してひとり湖畔の花見かな

松本幸男

うたた寝の耳が捉へし鳥の恋

校庭の隅に畑や雀の子

北口富栄

連翹の黄のとびとびに高速路

採れたての蚕豆青し日の匂ひ

地場野菜買ふ道の駅余花白し

砂地宏子

ビル街のタンポポ一群れ黄の強き

武蔵野

やはらかき午後の陽とほす若葉かな

薫風や窓てふ窓を明け放つ

朴若葉揺らぐ木陰のにぎり飯

国立

大櫓の幣掛け揺るる府中祭

阿部幸子

つづら折日吸ひ風吸ふ若葉かな

陽の中にかたく二輪寄り添へり 国立 南場雅子

甲斐の山ほつほつ開く桜かな

特急の若葉を分けて走りけり

つつじ濃し白衣観音抱く山

堀越しに見ゆる藤棚風匂ふ

しなやかに薫風つかむフラダンス

緋牡丹の一面に咲き立ち尽す

柔らかき手揉みの新茶香り立つ

桜の実熟れて次々鴉群れ

土鳩鳴き揃ひ立ちたる葱坊主

灯台の小さな窓や花大根

捨て舟に絡み付きたり蔦若葉

桜老樹幹の脇芽も花着けぬ

花嫁が藤棚で待つ披露宴

公園のベンチを覆ふ桜葉

葉桜や少年の背の伸びにける

雛芥子の盛りや強き風の中

夏兆す花壇の白き花眩し

からたちの花の白さよ村は寂び

古里の山の土くれ独活届く

鐘の音の静かにわたる竹の秋

一雫残さず注ぐ新茶かな

青梅

横浜

志村みち

中村政子

阿部トキ

大久保義和

岡元枝

岡田幸吉

奥野周光

若き娘の二の腕白き立夏なり

葱坊主三つならびしプランター

法要の一族揃ふ花の下

桜しべ踏みつつ掃けり僧が妻

永き日の仏に廻す摩尼車

ムスカリの藍の花好き蛭蝶

卒寿の宴雨の鎌倉花の中

招き入れ真紅の牡丹見て貰ふ

白蓮に光眩しく立子の忌

強東風や鳶翻り翻り

物の怪の潜む暗さよ雛の間

トロッコに犬も乗りをり若葉風

山椒の花は細糸からむごと

鉢にやる水たつぶりや五月来る

ふくらみし花の蕾に寒戻る

二とせを眠りし牡丹咲きにけり

草木瓜や遠峰に一筋滝光り

どくだみの蔓延ぶる庭に住み古りぬ

葉桜の下やはらかき風起る

一輪の白牡丹なり供花とせり

湿りたる石棺の壁草青む

春暁やアンナプルナに茜さす

小原紀子

加藤和子

長野高朋

正木喜美代

松崎芽ぐみ

三木豊子

豊美佐子

横浜

満開の花の氣息や谷中墓地
潮騒の遠き目覚めや春の夢

川崎

高野翠子

夏立つや欄間の竜は天目指す
日のかげり釣鐘草の揺れかすか

鎌倉

恒川清爾

夏来る胸をはだけし西郷どん
背中まで白きドーラン夏祭

藤沢

湯浅政男

吉備だんこの粉をはたきて新茶かな
地下足袋で竹の子探る寺男

桑野

秋山憲三

六十年過ぎし二人の庭薄暑
教室に悲鳴のあがる春の雷

佐藤嘉洋

佐藤嘉洋

将軍の側妻の墓や八重桜
桜葉降るや谷中の塔の跡

静岡

岩崎武士

おたまじやくし日の漣に立ち泳ぎ
牛の顔撫ぜて餌やる穀雨かな

興津千鶴子

興津千鶴子

豆腐屋は村に一軒春祭
芽吹きたる柳すだれに檀那寺

木の芽張りいちやうやさしくなりにつけり
菜の花や小川一筋村境

病む友に田圃のれんげ一握り

静岡

繁田たけ子

家ごとの味や竹の子賜ひけり

巣づくりの鳩やホテルの厨口

音立つる雨を弾けり葱坊主

杉山 明

茶摘女の牛舎の影に休みをり

筍飯めんぱの蓋に分ちけり

家康の濠の深きに花筏

高橋一夫

さざ波に大富士揺るる代田かな

維盛の墓へ菜の花匂ひけり

行商の升に山盛るしらすかな

富田キヨ

竹の子や皮を剥かれてちんまりと

小粉団の花をこぼして郵便夫

雀来て花菜の色をこぼしけり

新川澄子

梨畑の芽吹へ葉を敷き込めり

つやけしの玻璃を透けたる若葉かな

春光を大海原の返したり

本多ひとみ

幾つもの鳥語飛び交ふ春の池

マンドリルの顔の隈取りうちらけし

シヨパン聞き珈琲淹るる蝶の屋

吉野美智子

沖待ちの船へ灯の入る朧かな

母の忌の来て明易の雀どち

新緑や無数の風が野を遊び

焼津

松永光代

葉桜となりたる八雲散歩道

友と会ふ桜葉降る音の中

白木蓮住む人の無き庭に咲く

川根本

鈴木裕一

車椅子桜吹雪を浴びてをり

花の雨歌声介護施設より

影絵めき茶屋の二階の春灯し

金沢

石川純子

落椿 観音道と標あり

人ごみにさまよふ夢や花疲

春の鴨置物のごと浮寝かな

田水張り浮島のごと屋敷林

頑なに小田守る爺の田植かな

茶屋町におわら流しや花雪洞

新緑の森に抱かれ蓮如像

夏うぐひす仏御前の由来読む

吹きながら追ひかくる子や石鹼玉

百本の薔薇百歳の門出かな

芍薬に日数残して転居かな

大寺の留守を一手に花辛夷

子鳥のばたつきゐたり鶏頭句碑

中空を鳴き渡りゆく通し鴨

噂や倒木の苔豊かなり

一振りの鍬に蛙のひとつ跳び

谷内瑞江

水上依乃

松井佐枝子

廣田宏美

白村喜久代

夕映えの色うつりたり白牡丹

木の陰に一かたまりや碇草

白山

鶴尾正江

初燕古巣を捜す番かな

涅槃図に初めて会ひて八十路かな

鮎子の銀鱗踊る舟の上

堀井

中石紀美代

蟹島賊朝の市場に透きとほり

二の丸のあとに群がる著莪の花

兼六の古き謂れや古都の春

敦賀

伊上はるゑ

花の雲百万石のお城かな

魯山人の寓居の茶席春惜しむ

卯波とお義経公のかくれ岩

咽喉鳴らし鴉水のむ田植歌

大田ふじ枝

釣糸を垂らし空みる日永かな

番屋あと海女足元に海胆の毬

大銀杏結ふ閑取や初夏の風

中川雅月

さゆらぎの海へ発光螢鳥賊

空よりも水眩しくて田を植うる

湯浴みせる五体菖蒲のかほりけり

倍野喜代子

夏霞む湖上はるかに竹生島

飛魚の網をそれたる銀の羽根

湫流の水の揉み合ふ岩魚釣り

走り茶の最後の雫かほりけり

前川千代枝

かたかこの花広がりて人拒む 敦賀 吉田紫火

老僧と老々男女の仏生会

さざ波の水田に山の笑ひをり

吾が五体峽の初音を聞きにけり 若狭 藤原玉泉

あつまれる饑に透けし海の碧

母子来て野仏へ挿す母子草 徳島 木村義郎

花二輪開花宣言この住処

簀多き吉野の河口初つばめ

土偶立つ笑みの姿の暖かし

初蝶の来る一丁目三番地 徳島 宮西修一

やはらかき山椒の芽に紅き棘

貝塚を懐にして薮椿

浄瑠璃の傘よりはらり桜かな 徳島 山本晴美

出迎へに燕飛び交ふ道の駅

雨に濡れ軒下に売る苺売り

校庭のひらいて閉ぢてチューリップ 徳島 山本瑤子

初音聴く受話器を耳に押しあてて

春昼やポストに文の落つる音

藤棚の風に寛ぐ老和尚 石井 高月 巖

白藤に黒く大きく虫動く

焼失の本堂拝む遍路かな

春寒や電球点る武家屋敷 小松島 岡田あゆみ

音もなく濡るる墳墓や花の雨

白蝶の迷ひ込みたる石舞台

桜並木借景に土地分譲中 小松島 田上幸子

あたたかや泥だんご干す秘密基地

気付かれず象舎の脇のつくしんぼ 福岡 相本和子

信号の切り変はるたび花吹雪

麻酔覚め腹のすくなり春の暮

帰省子の残してゆきし本のぞく 福岡 園田清子

バス停に誰が飾りし五月鯉

著莪の花訪ふ人も無き親王墓

段畑は空への階段げんげ咲く 徳島 鶴田輝代

花散るや梵字一字の自然石

千年越え藤艶やかに華やげり

朝駆けの蜂蜜買ひに麦青む 徳島 古山みどり

春宵や時の落ちゆく砂時計

断捨離を思ひ立ちたり花吹雪

麦秋や幽かにひびく雨の音 那珂川 高山ひさ子

連れ立ちて入部届けを新入生

春潮の引きてくぐりし大鳥居

春の鹿並びまどろむ神の鳥 西海 山下敦子

髪あげて白きうなじや夏めけり

幼きが夜焚きの灯り数へをり

岩肌に鼻押し付けて清水飲む
薄墨の浦の静かや春暮るる

那 郡

砂川道子

マングローブの中行くカヌー燕来る
拝所うかんじの暗き小窓や花梯梧

札 幌

田作和祝

せめぎあふ櫓の走り根新樹光

横山康博

人去りて囀もどる多喜二の碑

吉田克己

重たげに雪のせて立つクロッカス

江 別

太田佳美

残月の白はかなげに春の朝

新 潟

大湊とせ

眉月のオレンジ色に四月尽

倉田松仙子

春シヨール鞆に結びて一人旅

斎藤ヨシ

靴底の文様のまま春の泥

榊原キヨ子

薫風のみどり色して頬をなで

佐藤幸示

鯉のぼり上ぐる事なし女の子
何時の間にやぶれてゐたり春障子
一本の露のしうとめ残し置く
大桜村の名残りの社かな
耕人の鋤を支へに腰伸ばす
水車小屋屋根の朽ちをり苔の花
赤き灯の点る河口に月朧
松林を透ける潮と春の空
土筆嗅ぐ仔犬に綱をゆるめたり

老犬を乗せて花見の乳母車
大家族収めてゐたり花筵

新 潟

島津治子

鯉幟り小気味よく泳ぐ子が燥ぐ

花村ヨシ子

新茶くむ怒濤のひと日迎へんと

芳 賀

塙 テル

木洩れ日に片栗の花満ちにけり

開け放す部屋ごとに入る初夏の風

福武幸子

蝮出ると看板の立つ夏初め

花嫁のドレスの揺るる若葉風

佐 野

磯貝綾子

贈られし友の衣をつけ花見かな

桜古木枝の伸び来て手に届く

大川政子

谷川岳を背に落葉松の芽吹きかな

夫眠る笛吹坂に花吹雪

金子恵子

廃屋の庭に大きな紅枝垂

住職の逝去の報せ花の夜

黒川しげ子

桜葉降る道鏡塚の御前に

六角堂ガラスに映る若葉風

木村君子

薔薇の咲く夫の忌日の一日かな

エラスムス学ぶ方丈はたた神

齋藤ミチ子

代掻きの泥水匂ふ遠筑波

森またぐ濃き夕虹の二重なる

高田貴子

つつじ山花のじゆうたん歩みけり

夏立つや高き足場に笑ひ声

奥の院裏にまはれば破れ傘

佐野

中村友治

穂の先に風の立ち寄る麦の秋

菰原美穂子

春夕焼揺るる電車の中朱し

久田洋康

空高くたんぽぽの絮飛ばす風

茂木弘子

朝眼にも花びら散らす糸の雨

つくば

阿部より子

花桃に眼を移しゆく女学生

土浦

澤 照枝

湖に木々の芽吹きの色重ぬ

さいたま

須藤初枝

火渡りの行者に吹雪く花の寺

草加

鈴木清江

ふくろふを育む森の樟若葉

和光

板垣陽子

青蛙しろつめ草に埋もれり

新座

多田英治

河鹿鳴く旅の一夜を鳴き尽す

川越

常見イツ子

万縁に抱かれめぐる五色沼

人住まぬ庭を埋めし諸葛菜
若葉風寄り添ふ猫の深眠り
立ち入れぬ熊本城も花満開
啄木の通ひし質屋柿青し
白蓮のほぐるる玉の白さかな
おだやかに終る今年の桜かな
海霧流る通信使等の抜けし町
青葉風水屋の柄杓乾きをり
草餅の濃き色艶や越後より
柿若葉ピアノ教室今日休み
西行追ひ花を尋ねて北の旅
根上りの神社の松や風薫る
重さうな棕櫚の木の花こぼれたり
にらみ合ふ二匹のとかげ草むらへ
吾の宛名少し湿りぬ春の雨
チューリップ雨飲み干して耀けり
水面まで千鳥ヶ淵の桜かな
葉桜の色艶増せる昨夜の雨
山椒の芽雨粒乗せてやはらかし
広き畑風にまかせて白き蝶
芽柳の影を乱せり鯉の群
結界の敷石を越ゆ蟻の列

川越

山本敦子

千葉

喜多恭仁子

酒々井

櫻井住江

佐倉

中嶋久登

四街道

新谷八郎

船橋

後藤誠二

松戸

中川泰夫

東京

石川幸子

梅本不二男

岡村純子

草間三香子

東京

桑原優美子

天神の御礼参りや梅は実に

東京

宮脇秋峯

母の日が宅配便で届きけり

亀の子の祖母の畑に産まれをり

府中

竹村晃子

千枚田水の照り合ふ五月かな

五月風厨の中へ透き通る

府中

渡辺八枝子

草笛や学童疎開の日本海

桜しべ降り敷く古寺の明るさよ

日野

栗原紀美

木の芽晴芋銭の句碑を明るうす

母の日やチヨロチヨロ泳ぐ鯉の稚魚

八王子

井上篤子

ポピー咲く土手へ海風荒荒し

風やさし糸引くままの毛虫かな

町田

桔梗 純

蝌蚪黒々池の隙間に蠢けり

茶葉を煎る八十八夜土間の母

大駒泰子

後藤晴子

山吹や坂の下まで続きをり

歩を止めて躑躅の色の海のなか

横浜

坂本具子

雨音に花色さえて夏は来ぬ

滝の音を背に吊橋渡りけり

佐藤正美

柴田雅春

あぢさゐの薄紫の雨冴えて

彫りたての師の法名や桜まじ

大駒泰子

後藤晴子

百千鳥ハリーポッター城包む

地獄門背後に受くる若葉光

大駒泰子

後藤晴子

海霞み朝日に透ける淡路島

ちろちろと三葉芹分け水流る

横浜

大駒泰子

連翹の蝶の化身となりにけり

遠巻きに鳥の侍る花の宴

横浜

大駒泰子

あたたかや月桃の香にヨガポーズ

雲拂ひメタセコイアの芽吹きかな

横浜

大駒泰子

菖蒲湯の菖蒲にはしやぐ孫姉弟

浅蜷汁さつと散らせる青菜かな

横浜

大駒泰子

街行けば装ひ軽き立夏かな

湧水の水音幽か桐の花

横浜

大駒泰子

朝霞墨絵と紛ふ平川門

初夏の大漁旗揺れ鞆の浦

横浜

大駒泰子

花冷えや友なる星の一つ増ゆ

炭切株年輪数多山眠る

横浜

大駒泰子

茶摘籠あけて溢るる熱気かな

代田水川よりうなぎ手づかみに

横浜

大駒泰子

富士を背に大河を泳ぐ鯉のぼり

兄弟の一人が減りし初写真

横浜

大駒泰子

青梅宿宙返りする燕かな

金星の明るき寒に入りけり

横浜

大駒泰子

六地藏赤前だれに落花かな

金星の明るき寒に入りけり

横浜

大駒泰子

駒鳥に足を止めたり切通し

横浜

鈴木律子

前髪を切りて別人更衣

富田 要

雲厚き父の忌椎の匂ひけり

若林昌子

夏近し三角に切る胡麻豆腐

青木明代

花園に白き日傘の似合ひけり

川崎

飛行機雲二筋延ぶる花の空

大久保 進

あでやかな名前に映えて櫻草

安田良子

羽ばたけばカメラの連写風光る

横山ユキ子

三脚の肩に重たき薄曇かな

佐藤千晴

引き潮の杭に休める海鵜かな

久保田富士子

大太鼓聞こゆる不動青葉照る

鎌倉

一面に露の葉そよぐ浅き川

山本カツ子

整然と働き蟻の洞を出る

山本カツ子

磯の香を吸うてうぐひす艶めける

山本カツ子

日蓮像守られ蛙の合唱す

山本カツ子

笹酒を賜り酔ひぬ花祭

山本カツ子

茅ヶ崎

山本カツ子

人力車の花嫁へ舞ふ桜かな

山本カツ子

伊勢原

山本カツ子

棟梁の膝を払ひて櫻餅

山本カツ子

伊勢原

山本カツ子

制服の抱きし遺影梨の花

山本カツ子

伊勢原

山本カツ子

草若葉細波となる風の道

山本カツ子

伊勢原

山本カツ子

柔らかに盛り上る木々囁れり

山本カツ子

伊勢原

山本カツ子

犬が嗅ぎ少し食みたる草若葉

松田

古谷悠紀子

夏めくやおぼろ豆腐のつるりと

小田原

河野貞夫

日蓮の俎板岩や春の潮

山並に浮かぶ紫雲や桐の花

松本

藤森利子

樺芽吹き薄くれなゐの湖岸かな

友見舞ふ山路や土手の露の蝨

甲府

江口嘉郎

奔放に狹庭賑はす雪柳

雨雲の沸きて暗かり朴の花

静岡

石川裕子

刃物屋の込み合うてをり植木市

友の忌や若葉に光みちみちて

西村まさ

結願へ声を励みの遍路杖

庭先に枝とみまがふ蛇動く

望月敏男

春告鳥炊ぎの煙山裾に

野の光集むる樺芽吹き初む

矢野喜久江

母の日や母の代りの姉に会ふ

山裾に菜の花畑ひろがりぬ

横山かよ子

しばらくはせきに止まりし花筏

背のびして藤の香をかぐ童かな

阪根征矢子

辣蕪漬ことこまごまと長電話

吹きこぼす煎じ薬や走り梅雨

伊東

小梁洋子

花筏ぬつと現る亀の顔

焼津

小梁洋子

段畑に蜜柑の花の白さかな

対馬往けばヒトツバタゴの燦々と

津

瀬野喜代子

木の皮を撓る山猫子供の日

をさなごや手を打つ花のトンネルに

金沢

卯辰みち子

松の花腰をのぼして誕生日

立山を仰ぐ大橋 卯月波

清水文子

鶯のこゑかと朝の耳澄ます

牧の春羊啼く声風に乗り

田上ナツ子

急坂に羅漢の並び百千鳥

やま跡に埋もる鉄路さくら実

道場啓子

燕来て暮色の空をひとうねり

奈良の僧撒ける尊き団扇かな

西田たかこ

争へる後のむなしさ著莪の花

磨きたる窓いつばいに新樹かな

西田秀子

栗色の髪を結びあげ祭笛

ゴミネットたたむ肩にも桜葉

宮崎恵美

和紙で折る兜を飾る散髪屋

夜桜や看取り終へての気を安め

保田ひろ

山麓のソーラーパネル遅桜

比良の峰塗り潰したる春の闇

敦賀

内池宏行

竹の秋読経もれきく寺料理

母のさと双手に田螺掬ひけり

川口和代

浅き瀬に小紋のごとく落花浮く

春遍路一団となり小豆島

敦賀

前田登喜子

里山に彩り添へて山つつじ

春眠や一句は夢に忘れたる

山本一枝

鬱金桜風に遊びて空の青

オルガンにふるさと斉唱花万朶

御坊

清水勝子

満天の星残雪の富士見台

紅の牡丹傾ぐ蕪村句碑

大阪

入山繁幸

新緑の光に嬰兒初座り

晩春や外人墓地の海へ向き

明石

前島 幸

夕映えの綿雲染めて春行けり

綿菓子に顔を埋めて子供の日

徳島

浜野桃華

同窓会つなぐ手と手に風光る

ランドセル背負ふ笑顔や花の下

林 早苗

大和路の千本桜雨もよひ

海の歌歌ひて登る春の山

石井

木内珠美

手をつなぎ藤の寺まで歩きけり

観桜に行きたがらずに十六歳

木内マヤ

金曜日今夜はミモザサラダにす

雲低く垂れ込めてをり五月闇

福岡

石原好宏

鯉のぼり木々の緑を泳ぎをり

万象作品の佳句

飛 高 隆 夫

薄明に仄仄白き桜かな 中村 弘

薄明は、「日の出前または日没後見られる天空のほのかな明るさ」(広辞苑)であるが、この句の場合、日の出前のそれであらう。桜の花も、日に照らされ、大勢の人々に見られれば疲れるし、空気も汚れる。日の出前、夜の間に空気も澄んで、桜の花も湿りを帯び、本来の力を取り戻している。ほのかな光の中にほのぼの白く見える時こそ、桜はもつとも清らかな美しい。作者は東京の人。

麦の穂の風しろがねに走りけり 芝宮留美子

穂の出そろった麦畑の上を風が走り過ぎた。その時、麦の穂はいっせいに揺れて、白く輝いた。白銀のように光った。それを風がしろがね色に走った、と感得したのである。しろがね色に光ったのは麦の穂で、風ではないよ、というのは屁理屈である。よく見て、よく感じている。風の勢いのように一気に言い切っているのもよい。感性がよく働いている。作者は佐野の人。

バックナー中将の碑を哭く雪加 中本 清

バックナー中将は沖繩戦の米軍の司令官。日本軍の砲弾により戦死した。その現場となった丘の上に高さ一・二メートル程の石が、のちに沖繩島民の手によって据えられた。文字による説明はない、という。それがこの句の碑である。雪加は南島各地に留島として生息するヒタキ科の鳥で、沖繩にはひばりが分布しないので、ひばりとも呼ばれ、俳句では「島ひばり」と詠まれることもある。「哭く」は人の死を悼んで泣きさげぶこと。ひばりの声のように、天上から「チンチナー」、「チンチャイ」と降ってくる声を「哭く」と聞き止めたのは、敵将の戦死の現場に石を据えた島民の心と同じく、敵味方の対立を越え、共に戦争の被害者であるという思いであらう。作者は那覇の人。

海神へ瑠璃の灯ともし螢鳥賊 靄 田 勝 子

螢鳥賊は胴長六センチメートル弱の小形で、体の各部に数百個の発光器を備え、刺激を受けると青白い光を発するという。深海に住むが五・六月の産卵期には夜、光りながら浮上する。その発光を瑠璃の灯ともしびと把らえ、それは海をつかさどる神への捧げものなのだと作者はいう。螢鳥賊の神秘性を見事に表現している。作者は敦賀の人。

月はやし桜葉降る九段坂 奥澤よし江

九段坂は靖国神社に沿った坂である。靖国神社の桜は、今

は東京の桜の開花日を定める標準木があることで知られているが、かつては軍国日本の象徴とでもいうべきものであった。桜の花のように潔く散る、それこそ日本の兵士のあるべき姿とされたものである。さて、桜の花はすでに散り、今は萼に残った葉が散っている。「月はやし」は、雲の流れが速いのである。何やら不穏な感じがする。作者は市川の人。

さへづりを柩の姉と聴きにけり 宮田千恵子

囀りは雄鳥の求愛や縄張り宣言の声である。しかし「人間の耳には、春が来たよろこびの声ときこえる」(新歳時記)。思えば、哀切な句である。宮沢賢治によれば、死に際して人間の五感で最後まで働くのは聴覚であるらしい。柩の中、花に埋もれた姉が、この世で触れる最後の音。それが明るく楽しい囀りであることが、救いである。作者は福岡の人。

囀を啼き散らしたる大鴉 川村みよき

一句の情景は明らかである。その鴉がどういうつもりでそうしたのかは分からない。悪意の有無など分からない。その時の行動の流れの中で、自然にそうなったのかも知れない。しかし、小鳥たちにとって鴉は強敵である。そんな時、小鳥たちにショックは残るのだろうか、と余計なことを考える。自然の片隅のささやかなドラマ。作者は新潟の人。

天よりの追伸の如春の雪 勝木享子

関東地方の真ん真ん中に住む筆者などは、年に一度か二度

降る雪を待ち望んでいるが、雪国の人にとって雪がどのようなものであるのかは、計り知れないというより他はない。辛うじて、春の到来は、雪から解放される喜びが大きいのであると思うばかりである。さて、ようやく雪から解放されたと思ったら、また雪が降った。春の淡雪である。それを作者は、「天よりの追伸の如」と受け止めた楽しい機知の句である。作者は札幌の人。

海一枚 棚田千枚 春夕焼 河野尚子

棚田は平野が狭く、山がちな所で、耕地をより多く得る必要から生まれたものであるが、多大の労働力を必要とする。しかしまた、それは優れた景観美を呈し、日本の原風景の一つにも数えられる。この句は海辺の棚田の眺望で、筆者はかつて訪れた石川県輪島市の白米の千枚田を思い出した。「海一枚 棚田千枚」というリフレイン風の表現も無理がなく、また「春夕焼」の季語も適切である。漢字ばかりの作であるが作爲は感じられない。自然に収まっている。作者は金沢の人。

風の来て藤に重さの生れけり 喜多尾明子

藤棚の藤の花。風もなく静まっている時には感じない花房の重さ。しかし、ひとたび風に揺れると、そのゆうらりとした揺れ方は、たしかに重さがある、と感じさせる。藤の花に密着して、よく見、よく感じている。作者は東京の人。

五月の同人句会は、二十八日に行われました。梅雨の兆しが見えそうな曇りがちの日となり、句会への出足が懸念されましたが、三十七名の出席を得て活発な会となりました。今回より「選者のはなし」として、選者の先生方の選評をお送りします。

翠いろの豊かな流れ柳絮飛ぶ 古川 京子

「翠」は明るい感じのみどり、初夏にふさわしく且つユニークで面白い。豊かな流れというから、長瀬あたりの吟か。柳絮が飛ぶ今頃の素敵な光景。

隠沼にむせぶばかりや花茨 島野 ひさ

隠沼は、草木の陰で目立たない小さな沼のことだが、その周りに自生の花茨が群れをなし、芳香を漂わせている。「むせぶ」が工夫。静かな光景でもある。

お茶の井の水湧く力夏来る 山本 絢子

むかし、武将が茶を飲んだという湧き水が、今もこんなと湧き出て力を感じたという。季語が動かない。

滑走路たりし公園 苜蓿 奥 太雅

戦前、地方の各所に海軍の小さな飛行場があった。その跡地が今では公園となり、苜蓿が広がっていた。

(以上内海主宰選)

アシャと書く子規の手紙や薄暑光 須賀 允子

自分のことを、「アシャ」と方言で呼んでいる子規の手紙。それを見届けた作者。子規の人柄までもが想像され、子規

への親しみが湧いてきます。「薄暑光」は手紙が置かれている場所の様子を詠んだものでしょう。

万緑の底水音に包まるる 水野 加代

静かで深い万緑の底に居て、包まれるように水音を聞きながら、緑の深さを一層感じたという。静謐な句。

夏燕洗ひあげたる消防車 小林 珠江

洗ひ上げたピカピカの消防車が目に浮んで、分り易い句。夏燕が飛んですっきりと爽やかな句になりました。

(以上小林副主宰選)

七変化天狗の小道見え隠れ 柳澤 宗正

「天狗の小道」という何か謂れのありそうな道に、七変化(紫陽花)が咲き誇っていて、その道が見え隠れしている。「七変化」と「天狗の小道」の取り合わせが面白い。

熟れきつて麦は輝く波となり 内田 郁代

麦が熟し波打ちかがやいている光景。麦秋のなつかしい景を美しく詠んでいる。ただ、「輝く」と漢字にするとキラキラし過ぎるので、ここではひらがなが適切と思われる。

夕暮れて定家かづらの香なりけり 榎本 文代

定家かづらは、地味な白い花だが香が強い。夕暮れ時に、周りの景が闇に沈んでいく頃に、その香がますます強くなったという。定家かづらの本質が、うまく捉えられている。

(以上原田顧問選)

(山本右近)

第十三回「万象」千葉県支部俳句大会

五月二十七日(土)、十三回目の千葉県支部俳句大会が千葉市稲毛公民館・講堂で開催された。当日は初夏の清々しい天気恵まれ、活気溢れる大会となった。

吟行地は、根上がりの松が有名な「稲毛公園」、大正時代の洋館で浅草の神谷バーの創始者である神谷伝兵衛の「稲毛別荘」、大同三年(西暦八〇八年)創建の「浅間神社」、「千葉市ゆかりの家・いなげ(清朝最後の皇帝愛新覺羅溥儀の実弟溥傑の新婚の家)」等。内海良太主宰はじめ、千葉支部の皆さんが、自由に稲毛の街の散策を楽しんだ。

午後からの俳句大会は内海主宰以下総勢四十名で実施された。残念ながら大坪景章名誉主宰の元気な姿は見られなかった。主宰からは「今日の大会は俳句の勉強とともに楽しんでやって下さい。次回からは他県の同人・会員の方にも積極的に参加してもらいます」というお話があった。

(大坪あきら)

内海良太主宰特選

ワイン王の館かすかに微匂ふ

大山春江

沢辺たけし特選

新緑の木々が押し合ふ社かな

須川 健

内藤 恵子特選

新しき神門 香る夏はじめ

内田 郁代

山本とく江特選

夏座敷壁に溥傑の愛の詩

内海良太

高得点

花みかん昭和のままだに残る家

大内佐奈枝

太々と夏越祓の墨書かな

内海保子

伝兵衛の窓万緑へ開け放つ

山下良江

端居して溥傑の海を想ひけり

高田ミネ

新樹光古地図に遺る海岸線

横川良子

主な句

木の香立つ神門潜る揚羽蝶

山本とく江

若夏や屋根の鯉尾を跳ねし

沢辺たけし

閉ざされし防空壕や夏落葉

穂苅照子

海岸の名残の砂や小判草

奥 太雅

松落葉海気館跡このあたり

久保村淑子

藤ゆらりゆらりこぼる溥傑の居

大坪あきら

朝涼の松葉踏む音やさしかり

小林あけみ

溥傑の書何かきこゆる花棟

鹿毛満子

逃げ水や電気ブランのある酒屋

岡野恵美子

をがたまの匂ふ階神の庭

大月玲子

静岡「初花」武蔵野吟行

「武蔵野歳時記」完説記念

初花俳句教室は、故浅場芳子先生が立ち上げた講座で、俳句に關した本の講読と実作を主に学習を続けて来た。細見綾子先生の「武蔵野歳時記」を一年かけて講読、その記念として、五月二十日（土）、国立市の谷保天神、三鷹市の野川を吟行した。吟行地の案内を内藤恵子同人、そして交流吟行会とすべく、原田しずえ「万象」顧問、山本とく江同人、赤堀洋子同人に参加いただき御指導を賜った。

真夏のような日差しの中、国立駅で関東組と合流、谷保天神へ。社殿を巡り、梅園の茶店の冷し甘酒、ゼリーで喉を潤す。はけの水に沿ひ弁天池へ。野川公園にて七句投句で句会。静岡組にとつて、沢木欣一先生、細見綾子先生をより一層近くに感じた吟行であつた。

湧水のきらら沢蟹まだ白し 石川裕子
枝蛙谷保天神の杜に鳴く 吉野美智子
神鷄の尖る一と声青葉闇 小川明美
武蔵野の空の青さへ今年竹 藤本節子
谷保天神合格ゼリーてふ甘さ 荻野加壽子
千年の檻の木下や甘酒屋 藤原千代子
お社の上に開けり朴の花 赤堀洋子
柏手を打てば万緑ゆらぎけり 山本とく江
天満宮めぐるはけ水楠若葉 内藤恵子
谷保天神綾子師僊ぶ泉かな 原田しずえ

俳人協会編「俳句カレンダー」平成30年版

体裁 月別 表紙とも十三枚綴り壁掛用
内容 表紙 秋元不死男・古館賢人

有馬朗人・関森勝夫・阿部月山子・加藤耕子・永瀬十悟
井上弘美・角谷昌子・堀未知子・小川輕舟・角川春樹
伊東肇・山尾玉藻・淵脇護・久保田哲子・鷹羽狩行
松尾隆信・江崎紀和子・黛 執・森目良雨・西嶋あさ子
加古宗也

（掲載月順）表紙を含み四三一句掲載
（ジュニアの俳句十三句掲載）

頒価 一部 一、二〇〇円（協会渡し）

送料 一部四九〇円／二部六四〇円／三部／四部七五〇円

五部／六部八五〇円／七部／八部九〇〇円

九部／十一部一〇五〇円／十二部以上実費（宅配便）

発送予定 十月上旬より

申込先 「万象」同人・会員の申込先

（締切 九月二十日）

〒277・0027

千葉県柏市あかね町24-9

内田 郁代 Tel 04・7163・6810

※部数と送付先を明記の上、できるだけ各句会で取りまとめお申し込みください。

「万象」中央句会五月例会

平成29年5月6日
東京文化会33名

内海良太主宰選

花叢風木舎の庭なつかしき
神の鶏樹上に眠る四月尽
新緑の風に吹かれて雨情の碑
西郷どん見上ぐる子らの夏帽子
軍港の錆鉄の山春夕焼
よなぐもり子規従軍の旅靴
たんぼの絮毛や猫の耳うごく
乾きたる敷布まつ白夏は来ぬ
尼様にお衣替ふる立夏かな
薬師寺の跡たんぼの野となりて
地獄門背後に朝の若葉光
花筏潮入池に細き帯
母逝きしあの日もここに藤の花
一心にみがく湯殿や建国日
闇まつり蛇屋の女色白し

原田しずえ選

八ヶ岳すつきりと晴れ夏燕
たそがれて光放さず藤の花
蜜豆に一息したる人疲れ
子規球場若葉の中の始球式

佐藤晴子 森岡恵子 山本絢子 佐藤晴子
須賀允子 須賀允子 浅井敦子 島野ひさ
吉中愛子 芝宮留美子 桔梗 純 芝宮留美子
中村千久 亀田やす子 小池宗彦 南雲秀子
飛高隆夫 奥太雅 佐藤晴子

越後より届く草餅母の味
田に注ぐ水音高し竹の秋
牧場にパン焼く匂ひ姫女苑
さくら薬踏みて参詣三百段
大道芸の声かん高し桜の実
投げ足を駅のベンチに花疲れ

江見悦子選

植うるたび風の生まるる早苗かな
蜜豆に一息したる人疲れ
新緑や路地にひと竿日章旗
噴水のズズと音立て噴きはじむ
彫りたての師の法名や桜まじ
子規球場若葉の中の始球式
よなぐもり子規従軍の旅靴
会果てて沖縄もづくすすりけり
藤の房転がるやうに熊ん蜂
天敵を知らざるままに蟻の列

「万象」同人句会五月例会

内海良太主宰選

この辺りの者でござると庭の藝
翠いろの豊かな流れ柳絮飛ぶ
薄暑光艶めく葡萄の床柱

山本絢子 奥太雅 南雲秀子 須賀允子 浅井敦子 内海良太
網島 清 奥太雅 田中道江 内海良太 桔梗 純
佐藤晴子 須賀允子 内藤恵子 柳澤宗正 網島 清
山本右近 古川京子 内田郁代

平成29年5月28日
俳句文学館 37名

葉桜の陰深みたり西行庵
日曜のみ開く床屋の鉄線花
隠沼にむせぶばかりや花茨
天を突き竹皮を脱ぐ賤ヶ岳
お茶の井の水湧く力夏来る
滑走路たりし公園苜蓿
芋植えてずり落ちさうな峽の畑

小林愛子選

アシャと書く子規の手紙や薄暑光
能登びとの柿渋染めの夏帽子
山鳩のよく鳴く母の日なりけり
髭を剃り天下祭に馳せ参ず
万緑の底水音に包まるる
隠沼にむせぶばかりや花茨
夏燕洗ひあげたる消防車
いつせいに芽花そよげる雨の前
通夜の庭さみだれ傘のふれ合へる
一輪のオールドローズかぐはしき
原田しずえ選

山本右近	名和政代	島野ひさ	竹澤竹里	山本絢子	奥太雅	小林珠江	須賀允子	内海保子	谷田部栄	山田春生	水野加代	島野ひさ	小林珠江	内海保子	赤松郁代	江見悦子	柳澤宗正	内田郁代	谷田部栄	須賀允子
------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

葉ざくらやたたためば屋台ひと抱へ
万緑へ手足けりあぐ乳児かな
夕暮れて定家かつらの香なりけり
桑の実の酸つばきもよし分け合うて
早苗田に転がりさうな石仏
渡良瀬に筑波山をさがす蠶蚕
内海良太
木内徴子
榎本文代
須賀允子
古川京子
赤堀洋子

▽中央句会 8月5日(土) 東京文化会館 午後1時より
▽同人句会 8月27日(日) 俳句文学館 午後1時より

万象基金のご報告

保田 榮子	六口
西田たか子	二・五口
匿名	五口
福島せいぎ	二五口
匿名	五口

(平成29年5月10日～6月15日現在。受付順・敬称略)
ご協力に感謝申し上げます。
「万象」発展のため、大切に
使わせて頂きます。

万象俳句会

北 南 西 東

消息等

「俳句四季」4月号発表の内海良太主宰の句、各誌で鑑賞。

「狩」6月号「秀句探索」の頁で、仲村折矢氏が「夜の部の席とれてより日の永し」を鑑賞。

日永とは昼間の時間が長いことをいうが、実際に最も長いのは夏至の頃である。冬の短日に比べて随分長くなったように感じるという気分的な表現である。それに加え、芝居見物であろうか、夜の部の席しかとれなかつたというのだから、尚更長く感じられることだろう。しかし春のどかさとは芝居見物の期待感とで、そう悪くもない時間のようなのである。

「天為」6月号「現代俳句鑑賞」の頁で、丸谷三砂氏が「鶴鶴と石を分かちてあたかし」を鑑賞。（後半部分のみ）

「あたか」は、春の時候の季語。春の心地良い陽気の体感としての暖かさが本意である。しかし、句の内容に添った情感を込めて用いることが多い。掲句では「鶴鶴と石を分かちて」という内容に、人と鶴鶴の距離感の親しさがある。季節

的な暖かさに加えてこうした情感を内包する季語として定着しつつある。

「太陽」6月号「秀句の窓」の頁で、吉原文音氏が「花冷えの蔵に招かれ志功の画」を鑑賞。

「即物具象の写生」を結社の理念とする。

掲句は「花冷えの蔵」の静と、そこで見た棟方志功の躍動的な線で力強く描かれた画の動の取り合せが見事。

「俳句界」4月号の主宰句、各誌で。

「ひいらぎ」6月号「現代俳句の鑑賞」の頁で、岸本隆雄氏が「緑蔭に隊列解ける鼓笛隊」を鑑賞。

厳しい日差しの中を行進してきた鼓笛隊が、緑蔭に入り隊列を解いた。この緊張が解けた一瞬を捉えている。特に、強い日差しの中での洋画風の明るい印象と、緑蔭に入った時の色彩のトーンの変化が面白い。俳句は継続した時の流れの、ほんの一瞬を切り取って、その時の感興を表現するものと思わせる句。

「春嶺」6月号 同句を、縣恒則氏が「一瞬の平穏を把握」と鑑賞。

句会だより

俳人協会千葉県支部第28回俳句大会

4月29日、徳田千鶴子氏が「秋櫻子と葛飾」を講演。「万象」から次の句が入選。

蓮井崇男 特選

鬼やらふ声一斉に保育園 内海保子

入選句

赤子の手閉ちて開いて春を呼ぶ 三屋英俊

水底の点ほどの蛸蚪尾を揺らし 赤堀洋子

榛の花はぐれ袴くものあり 内田郁代

すたすたと来て剪定の十五分 山下良江

葛城山の蓬であれば籠に摘む 内海良太

札幌清風句会吟行句会 高山誓英氏の

巻頭を祝い、5月28日厚別神社周辺を吟

行。8名参加。朝からの雨も上り、社に

続く緑蔭の小道は緑の香りに包まれ、散

策日和の一日となった。

木の瘤は仏の一つ青葉園 高山誓英

揚雲雀空高低に飛び交ひて 田作和祝

木もれ日の背や肩に受く落花かな田作八千代

新緑の映りて速き流れかな 桜井澄子

一隅に朱の極まれり木瓜の花 木村としみ

夏蝶の舞ひ行く道の定まらず 松田エリ

万緑をまとひて社鎮もりぬ 大内マキ子

（報・江見悦子）

新規会員を紹介します

姓 号

郵便番号 〒

住 所

投句者住所 〒

投句者姓号

電話

全国俳句大会 投句用紙

※本用紙で二組まで投句出来ます。不足の時はこの用紙をコピーしてお使いください。

(電話

)

投句締切

8月20日

・投句料

円(組) 同封しました。

・大会に(出席・欠席)します。いづれかに○印を。

住所

姓 号

2句1組 1,000円

2句1組 1,000円

宛先

〒249-0007

逗子市新宿2-3-13

409

卯辰美苗

毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊

俳句界

2017年8月号

特集

【素材編】

○孫 依田善朗

○ペット 国光六四三

○カタカナ松苗秀隆

○エロス高勢祥子

【表現編】

●季重なり

山本一葉

●切れ字重複

川越歌澄

●三段切れ

涼野海音

特別作品50句

宇多喜代子

杉田久女と橋本多佳子

○二人が愛した小倉

○北九州俳句探索案内○久女・多佳子代表句

○作家が見た二人抜巻○松本清張・田辺聖子

○エッセイ 坂本宮尾 石川一歩

本セレクトジョン結社「水輪」阿部王二

抜井諒一「群青」



佐高信の甘口で「コンニチハ」!

清水まり子 (演歌歌手)

別冊 投稿俳句界

一流選者20名!
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社文学の森

お求めは...〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

「万象」主宰 内海良太第一句集

青嶺

四六判、一八四頁、クロス
背綴上製本、二五〇〇円
ISBN 978-4-946374-44-9

雪溪を講の 一列横切れり
猪垣を一枚外し盆の道
祭馬どうしていいか分からぬ眼
ぼろ市にぼろのこゝくに疲れたり
認識と抒情の間に豆を打つ

飛高隆夫著(万象同人「万象作品」選者)

中原中也の時間

四六判、二四六頁
上製本、三千元
ISBN 978-4-946374-45-6

「万象」の会員様には各二千元(税別)でお届けします。

感性を記録する

有文社

〒352-0033

埼玉県新座市石神3-17-7

電話 042-4775-00436
ファク 042-4777-00741

(あなたの句集も制作します。まずはお電話下さい)

あとがき

▽前号から、静岡の皆さんの手による「郷土の俳人」「文学散歩」が始まりました。発見に満ちた新鮮な頁です。どうぞ楽しんでお読みください。

今月号の「続・万象と共に⑧」で紹介されている、小林良作者の評論「八月や六日九日十五日」を購読希望の方は、編集部で幹旋致しますのでご連絡ください。一部九百円（送料込）です。今月号の「珈琲タイム」は、頁数の関係でお休み致します。ご了承下さい。

（江見）

▽新人賞は東京の中村弘さんに決まりました。昨年は万象俳句賞、記念賞と応募され、チャレンジが力となることを教えられます。「万象」に新しい風が吹いて来そうです。今月に掲載予定だった「私の一冊」は来月になります。

（文代）

▽毎月末に「万象」誌が届くのを楽しみにしております。北海道から沖縄までの四季が凝縮されており、句の中から作者の生活ぶりや風景を窺うこと

ができ、日本列島の広さに感銘を受けます。

（大木）

▽浦和句会の合同句集『麦魚』第二集を発行。それぞれの地域でお世話をいただいている句会の指導者の皆様を中心に送らせていただきましたところ、ご丁寧なご挨拶を頂戴致しました。この場を借りて御礼申し上げます。簡素な句集ですが、ご希望の方にはお届けする用意がございますのでお知らせください。（千久）

▽先日近所で、ほたる祭があった。

祭の二日間で、人工飼育された二千匹の螢が会場に放流される。螢は水のきれいな場所にしか育たないと言われるが、放たれた螢は大丈夫かと案じられる。ニューヨークに住んでいた頃、毎夏セントラルパークの芝生の中から湧きたつ螢を見に行った。水辺でもないのに幻想的な螢狩だった。

（規子）

▽八月ほど日付を六日九日十五日と重ねるだけで重い意味を持つ月はない。

（八月や六日九日十五日）この句の作者についての本（「鴻」同人小林良著作）によると十二名もいる由。興味深い。

（右近）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更等 住所変更、退会等については左記にご連絡願います。

〒285・0922

千葉県印旛郡酒々井町中央台17-12 竹澤誠治

万象 八月号

第十六巻第五号 通巻第一八五号

平成二十九年八月一日 発行

主宰 内海良太

発行人 小林愛子

編集人 江見悦子

〒241-0816

横浜市旭区笹野台三二六二二

万象発行所

☎〇四五・三六一七五九一

平成二十九年 度「万象」 全国俳句大会案内

開催日 平成二十九年十月二十九日(日)

会場 ホテルJALシティ田町(東京都港区芝浦三ー十六ー十八) ☎03・5444・0202

交通 J R田町駅・芝浦口(東口)より徒歩5分

当日の予定

大会 午後一時(受付正午より)ー三時四十分

講演 主宰挨拶、万象俳句賞・「万象」新人賞授賞、新同人発表、大会作品発表など

懇親会 飛高隆夫氏(万象作品選者)「木下夕爾の詩と俳句」

会費 午後四時ー六時

申込み 一万二千元(大会・懇親会を含む)

申込み 八月二十日(日)までに会費を左記にお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

郵便振替口座 00150191729472 古川京子 ☎04・7163・3962

大会作品募集

作品 二句一組(二組以上歓迎)「万象」誌(七・八月号)巻末の綴じ込み用紙をご使用下さい。

住所・姓号・電話番号・大会出席の有無をお書きください。

投句料 一組千円(句稿に同封)▽締切 八月二十日(日)

投句先 〒24910007 逗子市新宿二ー三ー十三ー四〇九 卯辰美苗 ☎046・872・0824

有志吟行句会 十月三十日(月) 浜離宮恩賜庭園、増上寺、芝公園等周辺を予定。希望者のみ。(詳細別途)

平成二十九年 度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 内海良太
実行委員長 沢辺たけし